

岐路に立つ、これからの「お葬式」

— 死者と共に生きてゆく —

本日のスケジュール

※質問は質問票とQ&A機能にて受付

13:00 開会の辞：司会 工藤量導（浄土宗総合研究所研究員、大正大学非常勤講師）

挨拶 浄土宗宗務総長 川中光教

挨拶 浄土宗総合研究所所長 今岡達雄

13:10 趣旨説明：工藤量導

13:25 パネリスト発表（前半）（各20分、計40分）

①「日本社会と葬送の変動 —葬列から終活ブームまで—」

問芝志保（東北大学大学院准教授／宗教社会学）

②「寺院へのアンケート調査からみるコロナ禍が葬送に与えた影響」

小川有閑（大正大学地域構想研究所・BSR推進センター主幹研究員／宗教学）

14:05 休憩（10分）

14:15 パネリスト発表（後半）（各20分、計60分）

③「これからのお葬式—本質から葬送を考える—」

是枝嗣人（クローバーグループ 小金井祭典株式会社 代表取締役／葬儀分野）

④「コロナ禍における婚礼の現状と「お葬式」との共通点」

杉浦康広（目白大学短期大学部ビジネス社会学科専任講師／ホテル・ブライダル分野）

⑤「葬儀の読経と意味」

石田一裕（浄土宗総合研究所研究員、大正大学非常勤講師／仏教学）

15:15 休憩（25分）

15:40 全体ディスカッション（質疑応答）（75分）

パネリスト：問芝志保、小川有閑、是枝嗣人、杉浦康広、石田一裕

コーディネーター：工藤量導

16:55 閉会の辞：司会 工藤量導

挨拶 浄土宗総合研究所副所長 戸松義晴

登壇者プロフィール

問芝 志保(といしば しほ)

1984年、北海道札幌市生まれ。筑波大学第二学群比較文化学類卒業、大正大学大学院文学研究科宗教学専攻修士課程、筑波大学大学院人文社会科学研究科哲学・思想専攻一貫制博士課程修了。博士(文学)。浄土宗総合研究所「災害対応の総合的研究」研究スタッフ(2013～2017年)、日本学術振興会特別研究員、大正大学非常勤講師等を経て、2022年4月より東北大学大学院准教授(文学部宗教学専修)。著書に『先祖祭祀と墓制の近代——創られた国民的習俗』(春風社、2020年)など。

小川 有閑(おがわ ゆうかん)

1977年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学。専門は宗教学。現在、大正大学地域構想研究所・BSR推進センター主幹研究員、東洋大学非常勤講師、東京教区蓮宝寺住職。多摩・武蔵野地区で葬送や医療、福祉関係者をつくるライフエンディング研究会も主宰している。

是枝 嗣人(これえだ つぐと)

1979年東京都出身。立正大学仏教学部仏教学科卒業。2007年小金井祭典株式会社設立。当事者の気持ちに寄り添いながら数々の「唯一無二のお葬式」をコーディネート。グリーンサポートの専門家としても活動し、伝統的な葬儀の良さを踏襲しながらも、大切な人を亡くした方の哀しみを癒す作業(グリーンワーク)を実践する場としての”おみおくり”を提案し続けている。「ちょっと訊ける場所めぐり」というサロンを設け、お葬式のみならず地域住民のお困ごとのライフサポートを引き受けている。ラジオレギュラー番組「是枝つぐとのおみおくり百科」CRT 栃木放送・YBS 山梨放送にて毎週放送中、著書「日本一笑顔になれるお葬式」扶桑社より出版。

杉浦 康広(すぎうら やすひろ)

1973年生まれ。神奈川県横浜市出身。大学卒業後、株式会社京王プラザホテル入社。宴会サービス、宴会予約、ウエディング担当と宴会部門でのキャリアが大部分を占める。2019年より、目白大学短期大学部ビジネス社会学科専任講師。専門はホテル・ブライダルを中心としたホスピタリティ。投稿論文に「結婚披露宴におけるスタイルの変化と今後の動向に関する考察」(2021年)などがある。

石田 一裕(いしだ かずひろ)

1981年生まれ。博士(仏教学)。浄土宗久保山光明寺住職。浄土宗総合研究所研究員、大正大非常勤講師。高校卒業後、元全日本仏教会理事長の白幡憲佑に弟子入り、久保山光明寺にて修行。その後は都内寺院での勤務、副住職を経て2022年より、久保山光明寺住職。専門はインド部派仏教研究。著書に『お坊さんはなぜお経を読む?』など。

工藤 量導(くどう りょうどう)

1980年生まれ。大正大学大学院博士後期課程終了(博士・仏教学)。専門は中国隋唐代の浄土教思想。著書に『迦才『浄土論』と中国浄土教—凡夫化土往生説の思想形成—』(法藏館、2013年)がある。現在、浄土宗総合研究所研究員、浄土宗教学院主事、大正大学非常勤講師、淑徳大学兼任講師、浄土宗本覚寺(青森県今別町)副住職。浄土宗総合研究所・浄土宗の平等思想とLGBTQ研究プロジェクト主務。

シンポジウム趣旨説明

浄土宗総合研究所研究員・大正大学非常勤講師

コーディネーター：工藤量導

1、葬儀の多様化・簡素化—ウィズコロナからアフターコロナへ

- 毎日新聞「変わらぬコロナ葬 最後の対面、許されず」（2022年8月29日）
(<https://mainichi.jp/articles/20220829/ddm/041/040/085000c>)
- 読売新聞「コロナ感染者の葬儀、制限を大幅緩和…「納体袋」は不要に」（2023年1月7日）
(<https://mainichi.jp/articles/20220829/ddm/041/040/085000c>)
- 大河内大博「ウィズコロナ時代に寺院はどう向き合うのか」（『和合』令和3年3月号）
 - ・ コロナ禍の弔い
 - 多くの自治体で新型コロナで死去した場合、先に火葬され、収骨に立ち会えないケースが多数発生。厚労省・経産省の旧ガイドライン（2020年7月29日）の時点で、通常通りの葬儀執行（できる限り遺族の意向を尊重）を推奨。
 - ・ 新型コロナによる死別の複雑性
 - 突然死の別れに近い、後悔が残るあいまいな喪失、厳しい社会からの眼差し。
 - 葬送儀礼のグリーンケアの機能（遺族の受け止め、心の整理のサポート）。
- 朝日新聞「（フォーラム）葬儀式、私はこう考える」
(<https://mainichi.jp/articles/20220829/ddm/041/040/085000c>)
 - ・ 進む死の個人化、私たちに宿題 —誰もが尊厳をもって弔われる仕組みを
 - ・ 極端な簡素化は反対／身内だけ理想 生前葬を／時代で変化
 - ・ 派手な国葬、社会の現実とズレ —もはやぜいたく品、全体が縮小サイクルに
- 鎌倉新書 第5回お葬式に関する全国調査（2022年）
(<https://www.kamakura-net.co.jp/newsttopics/9302/>)
- 全日本仏教会、全日本葬祭業協同組合連合会「葬儀に関わる僧侶の実態調査」（2022年）
(<http://www.jbf.ne.jp/info/detail?id=16091>)
- 山陰中央新報デジタル「コロナと暮らし 最後の別れ 家族葬主流に 「少人数」「焼香のみ」 弔い不足訴える声も」(<https://www.sanin-chuo.co.jp/articles/-/336745>)
 - ・ 以前は一日をかけての参列が当たり前だったが、遺族以外は焼香して一時間もせず会場を後にすることも…。➡弔い不足の感
 - ・ 「故人の死を遺族だけで受け止めることが増えている」（大正大学・高瀬顕功専任講師）
 - 従来は遺族以外の弔問が、情動的な分かち合いになっていたが、今は死別の悲しみが遺族のみに一気に押し寄せる状況。
 - 一般葬の衰退（家族葬の標準化）は、潜在的な「悔いを残す人」（友人・知人）の増加にもつながる。
- 「みんなの墓」ホームレス支援ボランティア団体ひとさじ会…結の墓、山友会の墓
 - ・ 誰にも気づかれず忽然と消えゆく命…路上死の場合、誰もその人を見送ることもできない。仲間たちが手を合わす場所すらない、人生のあきらめ

- ・ 孤独を分かち合ってゆくために…せめて無縁仏とならないように、人としての尊厳を保ちながら旅立つことができるように
- ・ みなが手を合わせてくれるお墓…死後も大切な仲間とつながっていただけるという安心の「場」、現世から来世（極楽浄土）まで続くツナガリという心の支え

2、狭義の「葬儀式」と広義の「お葬式」

- 原田曜平・小祝誉士夫『アフターコロナのニュービジネス大全—新しい生活様式×世界15カ国の先進事例—』（ディスカヴァー・トゥエンティワン、2021年7月）

「共通するのは、高額の商品やサービスではなく、快適に過ごす“時間”こそが贅沢という発想。コロナによって人々の価値観は大きく変わったのだ」

- 「時間」というキーワードから、狭義の「葬儀式」だけでなく、広義の「お葬式」という観点から意見交換を行う

- 葬儀に関わる様々な“時間“

広義の「お葬式」

- ・ 2500年前 …仏教を開いた釈尊&浄土三部経
- ・ 日本古代～中世 …徐々に仏教が葬送儀礼と関わってゆく
- ・ 1900年頃 …日本近代における先祖祭祀&墓制について
- ・ 2010年頃 …近年におけるブライダル業界のトレンド
- ・ 2020年頃 …コロナ禍における葬儀の簡略化、コロナ禍の影響
- ・ 寺院との日常的交際 …月参り、年忌法要、定期法要、寺院行事
- ・ 臨終～葬儀当日 …訃報、搬送、遺体安置と枕飾り、打ち合わせ、納棺、その他
- ・ 葬儀式 …到着、打ち合せ（葬儀社、遺族）、開式、入場、読経、閉式 } 狭義の「葬儀式」
 - お花入れ、告別式、出棺、火葬、骨上げ、会食、お見送り
- ・ 当日～年忌供養…初七日、満中陰忌、納骨、お墓、グリーンケア
- ・ 読経・儀礼 …読誦聖典、授与戒名、引導作法、念仏（十念）
- ・ 年回忌 …満中陰忌、一周忌、三回忌、七回忌…
- ・ 弔い上げ …三十三回忌、五十回忌？御先祖

3、死者の復権

- 今岡所長からの問題提起

「“死者の復権”というテーマを考えてほしい。現代社会は〈死者〉と〈生者〉の勢力争いになっていて、とりわけコロナ禍で生者側の論理が強くなってしまったのではないか？」

- ・ 「死者の復権＝しっかり悲しむことの復権（グリーンサポート?）」ではないか。
- ・ “時間“という観点からいえば、「臨終前～葬儀当日～年忌法要～弔い上げまでの保証」ともいえる。
- ・ お葬式とは「死者の声を聴き、死者と共に生きてゆくための儀式」なのでは？
- 末木文美士編『死者と霊性—近代を問い直す』（岩波書店、2021年）

◇末木文美士：

- ・ 葬式仏教の問い直し（死者・他者論）
 - 「自分の死」から「他者の死」へ
 - 死者とのつながり（東日本大震災）
- ・ 死者問題の再提起（宗教、政治、原発、コロナ禍）

◇若松英輔：

- ・ “死者”という言葉は多義的
 - 西田幾多郎は「生きている死者」の意味、実在として憶うことは死者への供物

◇中島岳史：

- ・ エピデミックでの死者への敬意（ジョルジュ・アガンベン／イタリア）
 - あいまいな喪失、死に切れていない ➡ 死者として存在
- 鈴木岩弓・磯前順一・佐藤弘夫『〈死者／生者〉論』（ぺりかん社、2018年）

◇山形孝夫：

- ・ アフリカのウガンダに「生きている死者」（まだ日の浅い死者）という観念がある。
 - 戦前の日本社会も同様（仏壇と神棚＝死者たちの空間）

◇鈴木岩弓：

- ・ かつて死を語ることはタブーだった（脳死問題が変化の契機か）
- ・ 死者とは誰か？
- ①一人称の死者、②二人称の死者、③二・五人称の死者（先祖、英霊）、④三人称の死者
- ・ 日本における“死者の記憶”保持のメカニズム
 - 死者は「吊い上げ」を契機に先祖という集合名詞となり、やがて一般化し忘却されてゆく（②➡③➡④）。
 - グリーフワークの正常なプロセス（時間）
- ・ 土葬時代の伝統的社会的流れ
 - 関わりを持つ生者：イエの構成員、親族、地縁、僧侶など
 - かつて“死者の記憶”はイエの構成員を中心に担われた
- ・ 現在は「葬送専門業者」の関わりが顕在化している
 - 家族形態の変化が致命的な影響をもたらしている
- 貞極『蓮門住持訓』現代語訳（浄土宗出版、2005年）
 - ・ 貞極（1677～1756）は、江戸時代中期の浄土宗の学僧であり、質素を心がけ、戒を持することを重んじた。『蓮門住持訓』は浄土宗僧侶のあり方、生き方について事細かく説示した教訓書。

「今時の住職を勤める僧を見ると、檀家の扱いが甚だ粗略であるから寺が衰微するのである。檀家を大切にすれば、自ずと寺は繁栄するのである。その檀家というのは生きている檀家ではない。お亡くなりになった檀家である」（師である厭求上人の言葉）

日本社会と葬送の変動

—葬列から終活ブームまで—

令和5年2月13日(月) 於 大本山増上寺光摂殿 講堂

第45回浄土宗総合研究所公開シンポジウム

「岐路に立つ、これからの「お葬式」—死者と共に生きてゆく—」

パネリスト① 問芝 志保 といしば・しほ (東北大学)



発表のアウトライン

1. 葬儀とは何か —「生から死への移行」

2. 日本の「葬儀と社会」史

2-1
近世～近代初頭

吊いの身分格差と地域差

2-2
近代

「イエ+地域/専門
者(葬儀社・寺院)」
体制が確立

2-3
高度成長～バブル期

葬儀社の発展、葬儀
様式の標準化

2-4
平成後期～令和

新たな多様化と格差
(自由、孤立、長寿)

3. 葬儀のこれから

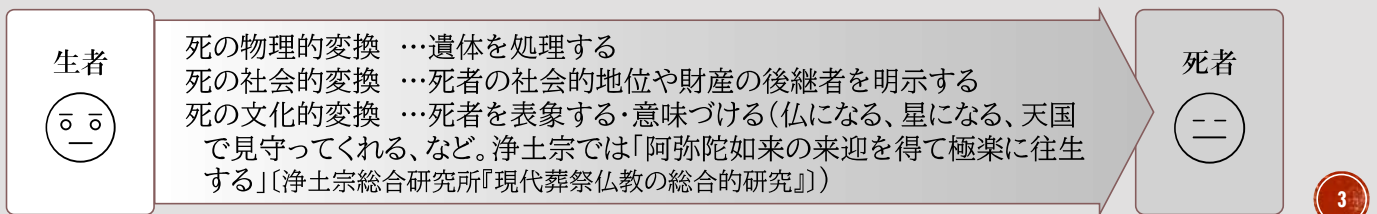
1. 葬儀とは何か

“伝統的な葬送儀礼”の流れの例(新谷尚紀ほか編『民俗小事典 死と葬送』)

1. 臨終儀礼 ～ 枕直しの儀など ～ 通夜 ～ 枕経・湯灌など ～ 納棺
目的: 遺体保全、靈魂鎮撫、魔除け ※あたかもまだ生きているかのように扱う
2. 葬儀(読経・引導・焼香) ～ 出棺 ～ 葬列(野辺送り) ～ 埋葬・火葬
目的: 靈魂の送り出し、告別、遺体処理
3. 中陰法要 ～ 忌明け ～ 弔い上げ=「先祖」になる
目的: 靈魂の供養(死者が先祖になる過程)、靈魂との交流(悲嘆をやわらげる)

💡 死は「瞬間」に起こって終わるものではなく、「生から死への移行」に一定期間を要する「過程」としてとらえられてきた

◆葬儀とは、**儀礼を重ねることで生者を死者のカテゴリーへと移行させる「死の総合的変換装置」**である。その過程は**遺族が死を受容する段階**としても機能している(山田慎也『現代日本の死と葬儀』)



2-1. 近世～近代初頭：弔いの身分格差と地域差

- 近世初頭まで： 武家や貴族と異なり、庶民層では「イエ」意識はまだ希薄で、立派な墓を建てることも禁止されていた
- 近世中後期～： 寺請制度の浸透+「イエ」意識の高まり
 - 「寺院に依頼し仏式葬儀を行うこと」が庶民層にも広まり始める(村上興匡「葬送と墓の歴史と現代」[山折哲雄監修『宗教の事典』所収])
 - 庶民層も個人・夫婦・世代単位の墓石を建て始める。ただし「先祖代々の墓」の継承はまれ。下層民や身元不明者の場合には「投げ込み」も(西木浩一の一連の研究)
- 全国各地でバリエーション豊かな葬送習俗が発展



2-2. 近代：祖先祭祀の励行とカロート式家墓の登場

- ◆ **明治中期**：法整備により「イエ」が制度化。また、「墓は永遠に保存すべき」、「墓は家督相続すべき」、「全ての死者は墓に入るべき」ことが法的に定められる
 - ◆ **明治末期～**：「イエ」や「先祖代々」観念が修身教科書に載るなど、祖先祭祀が「日本のすぐれた文化」として励行され、庶民層にも浸透
 - ◆ **大正・昭和初期の東京**：葬儀と墓の近代化
 - 「丸通夜+葬列〔葬儀社がサポート〕」→「葬儀+告別式」へと移行
- ※葬列が廃絶に向かった主な理由 …①過密化する都市交通の妨げとして問題視された ②都市域の拡大で寺院や埋火葬場が遠距離となり徒歩移動できなくなった ③明治末期に普及し始めた立派な祭壇と告別式が葬列の代替になりえた
- 都市計画・衛生・改葬のしやすさを求めてカロート式「一家一墓」タイプの墓が制度化



大正10年 朝日新聞
死亡広告「増上寺に
於て告別式執行候」



💡「イエ+地域+専門家(葬儀社・寺院)」体制によって、「全ての人が葬られ、弔われ、先祖になる」社会が確立

2-3. 高度経済成長・バブル期①：都市化・産業化

- ◆ **都市移住者が核家族を形成** =「宗教浮動人口」(藤井正雄『現代人の信仰構造』)
 - 不幸があると①郷里の菩提寺に依頼するか、②移住先都市で新たに菩提寺をもつか、③菩提寺をもたないか の3択。寺院との関係性が任意的・流動的に
- ◆ **都市の地域コミュニティは希薄** →葬儀社の役割が増大
 - かつての「葬具のレンタル+葬列の人足を担う存在」から、「プロフェッショナルとして葬儀一切のノウハウ・技術・人員を提供し、葬儀全体をプロデュースする、不可欠な存在」へと移行
- ◆ **霊園開発ブーム** →カロート式家墓が全国に普及
 - 葬儀や墓の地域的多様性は残りつつも、少しずつ失われ、全国的にゆるやかに標準化へ



2-3. 高度経済成長・バブル期②：“一億総中流”の標準化

◆ 葬儀の位置づけ …「地域ぐるみでの死者の送り出し」から、遺族にとっては「対価を払って受けとる商品・サービス」、参列者にとっては「弔問」へと移行

- バブル期前後：団塊世代が親世代の介護や葬儀を経験。コストやサービス、宗教的意義に対してネガティブな印象をもった場合、「自分の時には子供に迷惑をかけたくない、葬式は不要」との考えにつながりやすかったのでは

💡 イエ・地域コミュニティは弱まって…

国全体として経済的に余力があったため、「標準的」とされる仏教式・イエ式の葬儀や墓を、財力によって執行することができた

7

2-4. 平成後期～令和①：自由・自立・合理化／孤立化

◆ 葬送の自由化・自立化・合理化志向

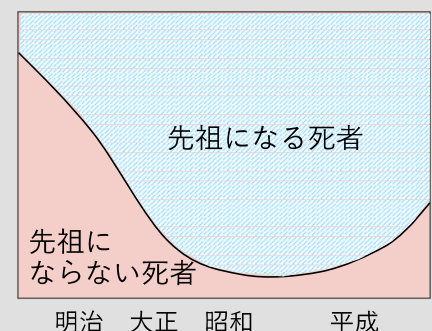
- 1990年代：「葬送の自由」運動開始、自然葬・樹木葬・合葬墓・ICカード式納骨堂などが登場
- 2010年代：上記の本格的な普及、自己決定・ACPの普及、家族葬・一日葬・直葬の普及
- 2012年：「終活」が流行語大賞入り 2014年：「墓じまい」登場
- 各種調査で延命治療・葬儀・墓は不要という人が増加している
- メディア報道では「子供に迷惑をかけたくない」が合言葉（隠れた流行語といってよからう！）

💡 「先祖になる」ことへの拒否感、あるいは遠慮

◆ 少子高齢化・低経済成長・自己責任社会と孤立化

- 2010年～：NHKの「無縁社会」報道キャンペーン
- とりわけロスジェネ世代（現在の40代～50代前半）に
単身・低所得者が多い）
- 家族も親しい知人もお金もない人を、誰が葬り、弔うのか？

💡 「先祖にならない」死者の増加



8

2-4. 平成後期～令和②：長寿化と葬儀の縮小

◆長寿化 …令和3年の死亡ピーク年齢(何歳で死ぬ人が最も多いか)は**男性85歳、女性92歳!**「子育て・社会生活を終え、余生を享受し、長期闘病・介護を受けた末に高齢で死ぬ」のが普通に

↓

①「**天寿を全うした死**」の場合、当人や遺族にとって無念さや思い残すところがほとんどないため、供養実践や宗教的霊魂観・他界観をさほど切実に求めない(森岡清美「先祖祭祀と世俗化」)

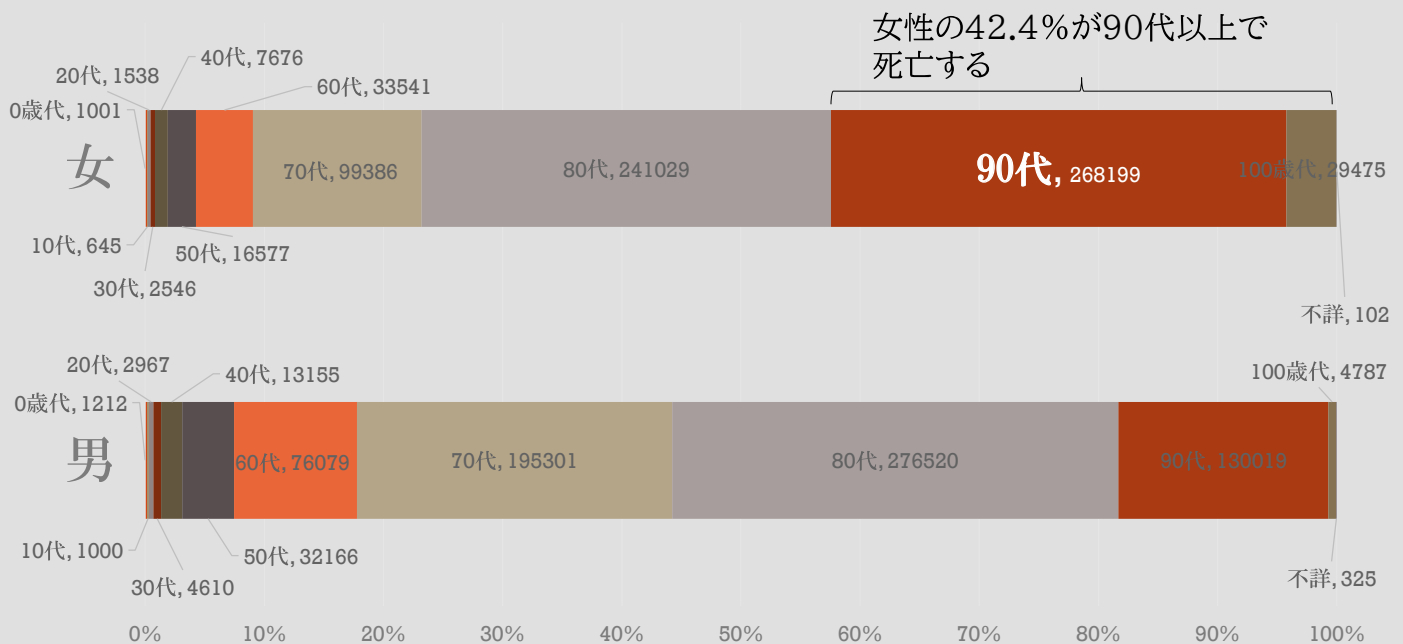
※「**若すぎる死**」や「**不慮の死**」の数は近代以前から比べれば激減。ただし、だからこそかえって悲しみが痛切になる(G.ゴラー『死と悲しみの社会学』)

②**長い余生**という時間そのものや、そのなかで行う「**終活**」が、かつて葬儀がはたしていた一連の「生から死への移行」プロセスを代替しうる

③死者当人の知人も高齢・死去しており参列者が少なくなる

💡 **葬儀の簡略化・縮小は必然といわざるをえない**

9



男女別、年間の全死亡者数を100%としたときの、年齢階層ごとの死亡者数の割合(2021年人口動態統計より問芝作成) ※数字は実際の死亡者数

10

3. 葬儀のこれから

◆ 今日も葬儀の宗教は仏式が89%((一財)日本消費者協会2022『第12回「葬儀についてのアンケート調査」報告書』。ちなみに形式では家族葬57%、直葬3%)。生から死への移行をうながすものとしての、寺院・僧侶による仏教的供養へのニーズは今も決して小さくない

◆ 社会の動向を見据え、今後はいわゆる一般的な狭い意味での「葬儀」に加えて

① 終活中の方、終末期の方とその家族

…「生から死への移行」を安らかにおだやかに遂げるために

② 家族や親しい知人をもたず亡くなる方(先祖にならない死者)

…日本が「全ての人が葬られ、弔われる社会」であり続けるために

③ 天寿を全うせずに亡くなる(若すぎる死、不慮の死)など、大きな悲嘆を抱える方とその家族・遺族

に対する**宗教的支援・精神的支援の必要性** へも視野を広げていきたい

寺院へのアンケート調査からみる コロナ禍が葬送に与えた影響

大正大学地域構想研究所・BSR推進センター主幹研究員
東京教区玉川組蓮宝寺住職
小川有閑

寺院向けWeb 調査 の概要

- 大正大学地域構想研究所 BSR 推進センターでは、新型コロナウイルスによる寺院活動への影響とその対応の把握、実践知・経験知の集約と共有、個々の寺院が抱える不安や課題の集約、可視化等の目的で「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」を4回実施。

	期間	方法	有効回答数
第1回調査	2020年 5月7日～ 5月24日	Google Form	517名
第2回調査	2020年12月7日～12月28日	Google Form	304名
第3回調査	2021年12月1日～12月22日	Google Form	353名
第4回調査	2022年12月5日～12月26日	Google Form	311名

報告書（大正大学地域構想研究所HPよりダウンロード可能）

- 【第1回】 <https://chikouken.org/wp-content/uploads/2020/06/036f50d3c678dd30836a3b9afe9a4bc0.pdf>
- 【第2回】 <https://chikouken.org/wp-content/uploads/2021/02/bbd69a86ee4fcf43e1af019e4b4ba36d.pdf>
- 【第3回】 <https://chikouken.org/wp-content/uploads/2022/02/5c1dddbaf8b95b66b921dd02840290dc.pdf>

回答者の属性（第1回）

寺院の所在地

北海道	17	滋賀県	21
青森県	8	京都府	18
岩手県	3	大阪府	35
宮城県	5	兵庫県	20
秋田県	10	奈良県	7
山形県	10	和歌山県	2
福島県	11	鳥取県	1
茨城県	12	島根県	4
栃木県	5	岡山県	0
群馬県	7	広島県	11
埼玉県	17	山口県	7
千葉県	14	徳島県	0
東京都	63	香川県	6
神奈川県	34	愛媛県	5
新潟県	5	高知県	2
富山県	20	福岡県	17
石川県	10	佐賀県	5
福井県	4	長崎県	5
山梨県	5	熊本県	4
長野県	4	大分県	5
岐阜県	4	宮崎県	2
静岡県	29	鹿児島県	2
愛知県	27	沖縄県	0
三重県	13	その他(国外)	1
		合計	517

所属の宗派

浄土真宗(各派)	191
浄土宗(各派)	149
曹洞宗	38
真言系(各派)	36
日蓮宗	30
臨済宗(各派)	22
黄檗宗	17
天台宗	15
時宗	9
融通念仏宗	2
その他	8
合計	517

回答者の年齢

20代	25
30代	115
40代	211
50代	118
60代	38
70代	10
80代以上	0
合計	517

回答者の性別

男性	479
女性	36
その他	2
合計	517

回答者の立場

住職	350
副住職	131
寺庭(坊守)	11
その他	25
合計	517

3

回答者の属性（第2回）

寺院の所在地

北海道	10	滋賀県	7
青森県	8	京都府	8
岩手県	1	大阪府	14
宮城県	4	兵庫県	11
秋田県	2	奈良県	7
山形県	7	和歌山県	2
福島県	6	鳥取県	1
茨城県	3	島根県	6
栃木県	2	岡山県	0
群馬県	1	広島県	10
埼玉県	13	山口県	3
千葉県	10	徳島県	0
東京都	49	香川県	1
神奈川県	20	愛媛県	3
新潟県	3	高知県	1
富山県	6	福岡県	8
石川県	4	佐賀県	3
福井県	4	長崎県	4
山梨県	2	熊本県	1
長野県	8	大分県	4
岐阜県	4	宮崎県	2
静岡県	22	鹿児島県	3
愛知県	13	沖縄県	0
三重県	3	その他(国外)	0
		合計	304

所属の宗派

浄土真宗(各派)	77
浄土宗(各派)	123
曹洞宗	22
真言系(各派)	23
日蓮宗	20
臨済宗(各派)	11
黄檗宗	4
天台宗	12
時宗	5
その他	7
合計	304

回答者の年齢

20代	8
30代	54
40代	127
50代	75
60代	31
70代	9
80代以上	0
合計	304

回答者の性別

男性	284
女性	20
その他	0
合計	304

回答者の立場

住職	213
副住職	70
寺庭(坊守)	10
その他	11
合計	304

4

回答者の属性（第3回）

寺院の所在地

北海道	10	滋賀県	8
青森県	5	京都府	13
岩手県	3	大阪府	17
宮城県	7	兵庫県	12
秋田県	4	奈良県	6
山形県	8	和歌山県	1
福島県	6	鳥取県	4
茨城県	5	島根県	3
栃木県	1	岡山県	0
群馬県	3	広島県	7
埼玉県	17	山口県	3
千葉県	12	徳島県	0
東京都	55	香川県	7
神奈川県	32	愛媛県	2
新潟県	4	高知県	2
富山県	4	福岡県	12
石川県	3	佐賀県	3
福井県	4	長崎県	5
山梨県	4	熊本県	1
長野県	6	大分県	4
岐阜県	3	宮崎県	1
静岡県	24	鹿児島県	3
愛知県	14	沖縄県	0
三重県	5	その他(国外)	0
		合計	353

所属の宗派

浄土宗(各派)	136
浄土真宗(各派)	77
真言系(各派)	41
曹洞宗	35
日蓮宗	23
天台宗	12
臨済宗(各派)	11
黄檗宗	8
時宗	4
融通念仏宗	2
その他	4
合計	353

回答者の年齢

20代	13
30代	66
40代	139
50代	84
60代	40
70代	11
80代以上	0
合計	353

回答者の性別

男性	325
女性	27
その他	1
合計	353

回答者の立場

住職	235
副住職	85
寺庭(坊守)	16
その他	17
合計	353

5

回答者の属性（第4回）

寺院の所在地

北海道	7	滋賀県	10
青森県	7	京都府	12
岩手県	2	大阪府	19
宮城県	5	兵庫県	11
秋田県	2	奈良県	7
山形県	5	和歌山県	2
福島県	8	鳥取県	2
茨城県	4	島根県	4
栃木県	2	岡山県	0
群馬県	3	広島県	7
埼玉県	10	山口県	2
千葉県	7	徳島県	0
東京都	61	香川県	5
神奈川県	27	愛媛県	1
新潟県	4	高知県	0
富山県	6	福岡県	8
石川県	1	佐賀県	3
福井県	3	長崎県	1
山梨県	3	熊本県	1
長野県	6	大分県	3
岐阜県	4	宮崎県	1
静岡県	20	鹿児島県	2
愛知県	10	沖縄県	0
三重県	3	その他(国外)	0
		合計	311

所属の宗派

浄土宗(各派)	145
浄土真宗(各派)	67
真言系(各派)	24
曹洞宗	20
日蓮宗	15
臨済宗(各派)	13
天台宗	10
時宗	5
黄檗宗	3
融通念仏宗	3
その他	6
合計	311

回答者の年齢

20代	10
30代	41
40代	121
50代	94
60代	34
70代	10
80代以上	1
合計	311

回答者の性別

男性	282
女性	28
その他	1
合計	311

回答者の立場

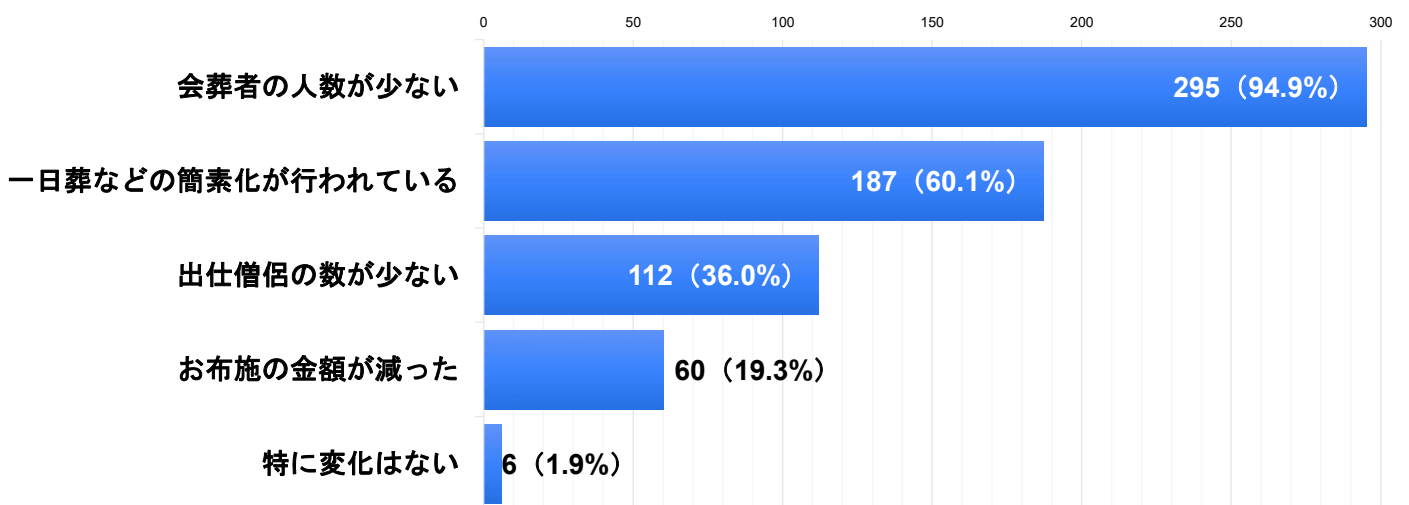
住職	220
副住職	70
寺庭(坊守)	10
その他	11
合計	311

6

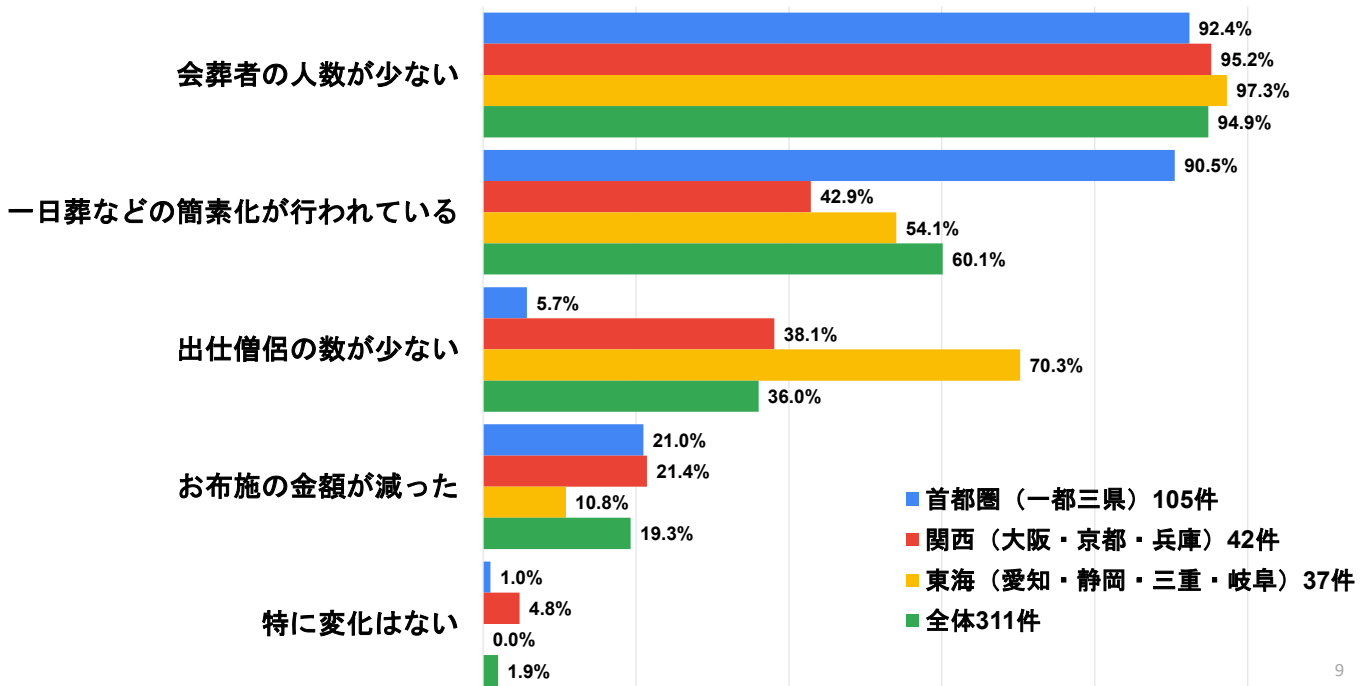
調査結果

葬儀への影響（第4回）

葬儀に関して、新型コロナウイルス感染拡大以前と比較して現在はどうな状況ですか。（複数回答可）

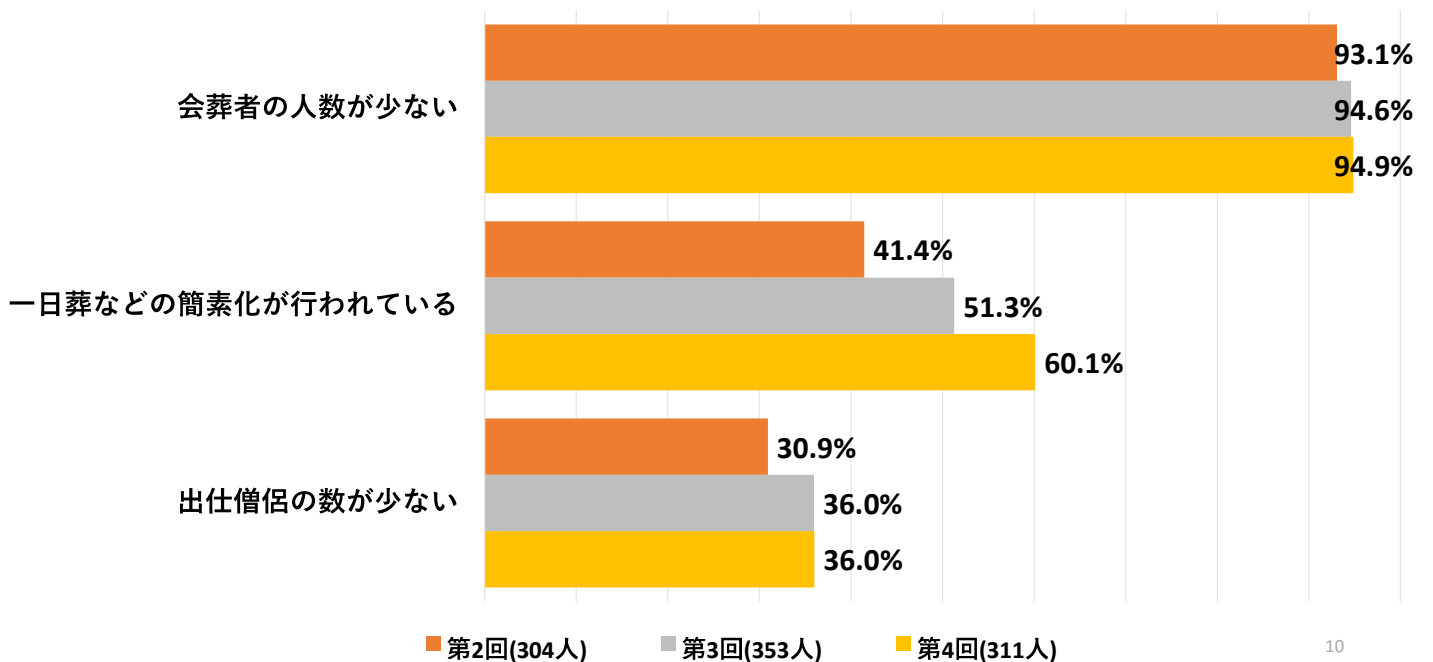


葬儀への影響（第4回・地域別）



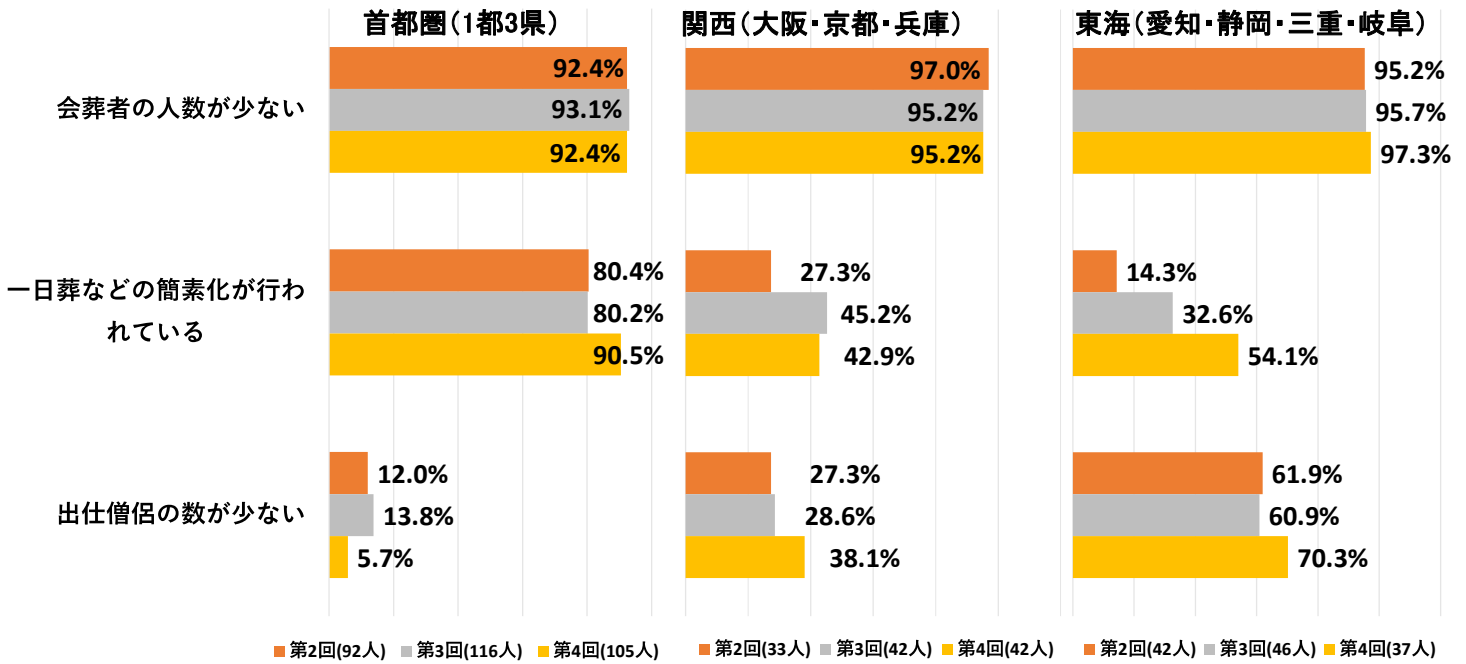
9

葬儀への影響の変化（第2～4回）



10

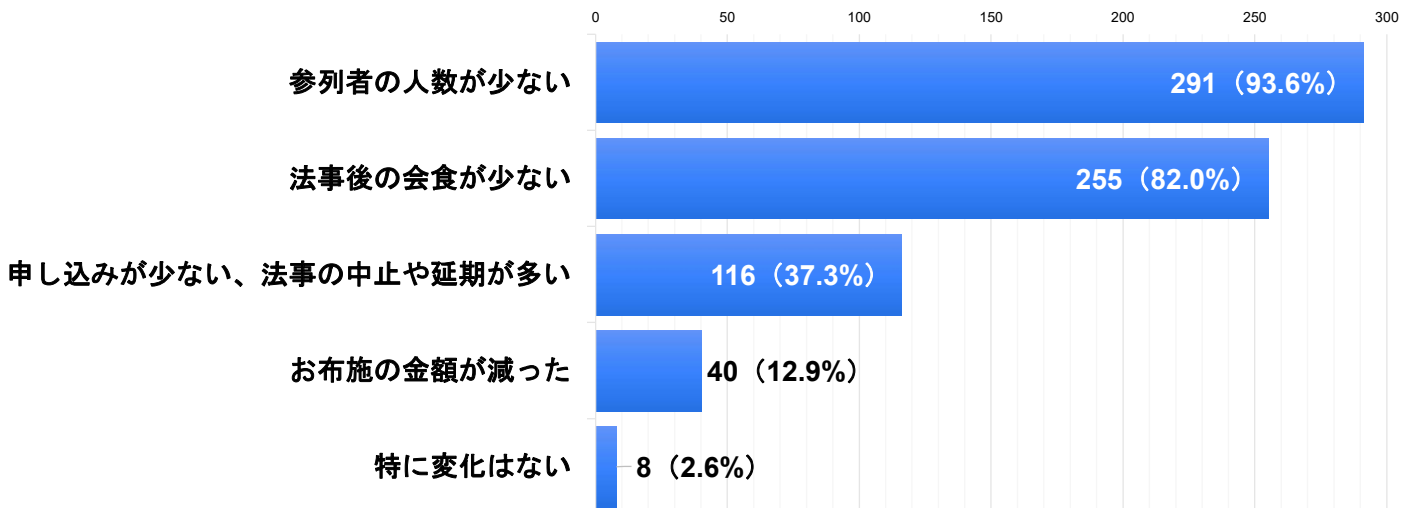
葬儀への影響の変化（第2～4回・地域別）



11

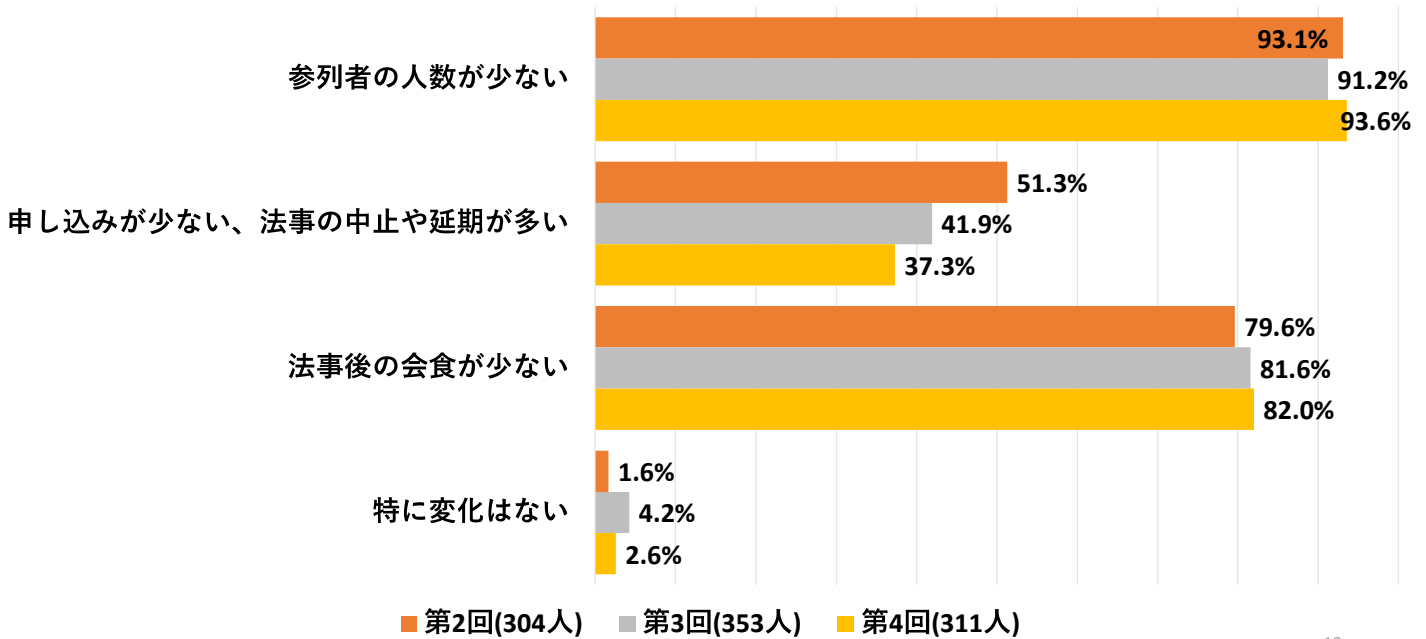
法要への影響（第4回）

年回法要に関して、新型コロナウイルス感染拡大以前と比較して現在はどのような状況ですか。（複数回答可）



12

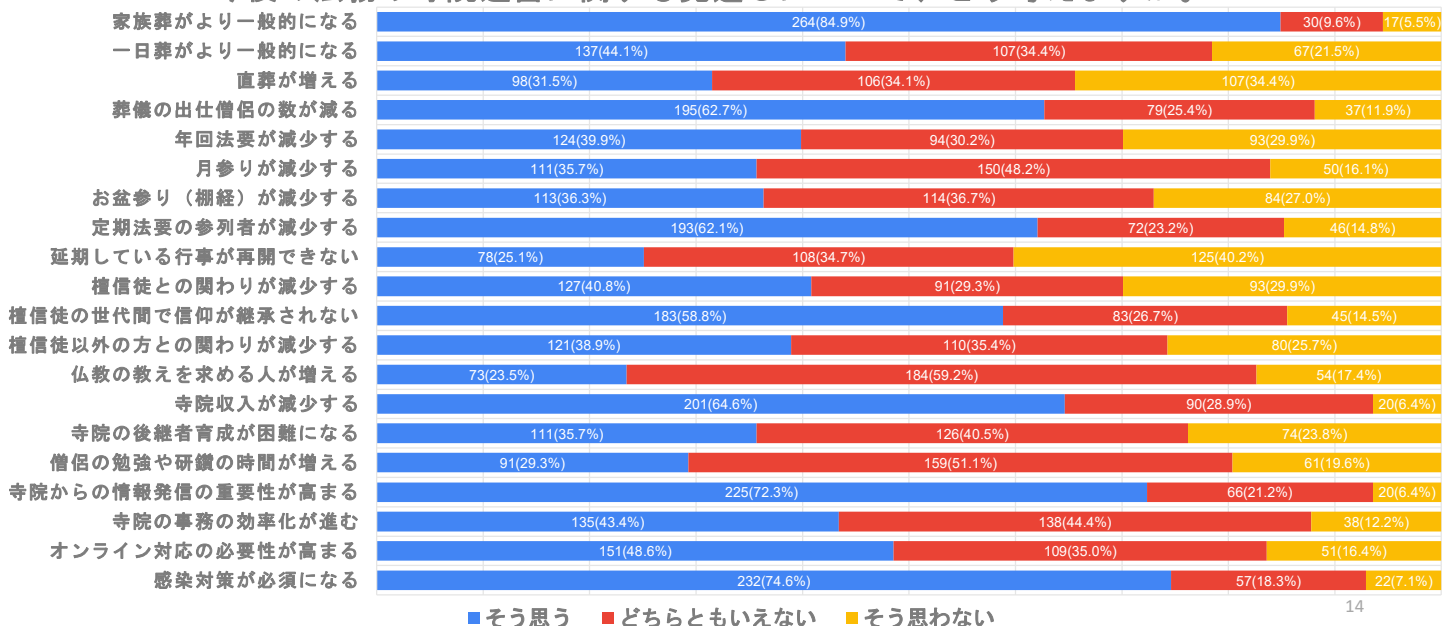
法要への影響の変化（第2～4回）



13

今後の見通し（第4回）

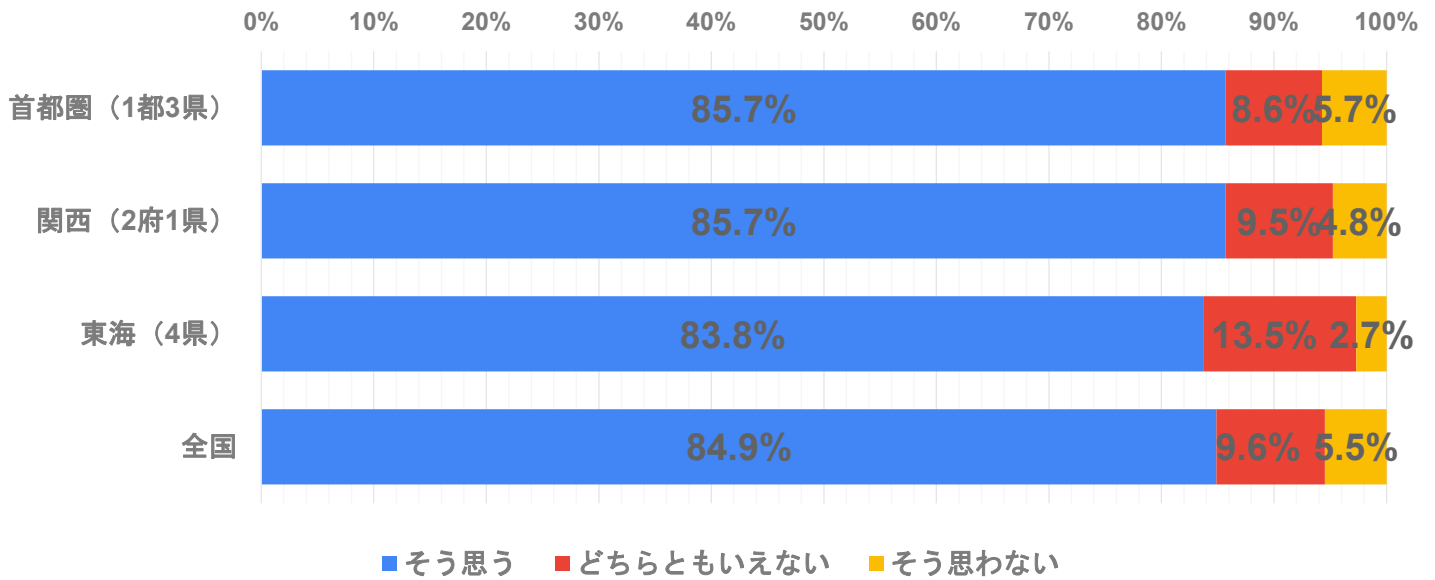
2022年12月現在、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、今後の法務や寺院運営に関する見通しについて、どう考えますか。



14

今後の見通し（家族葬）

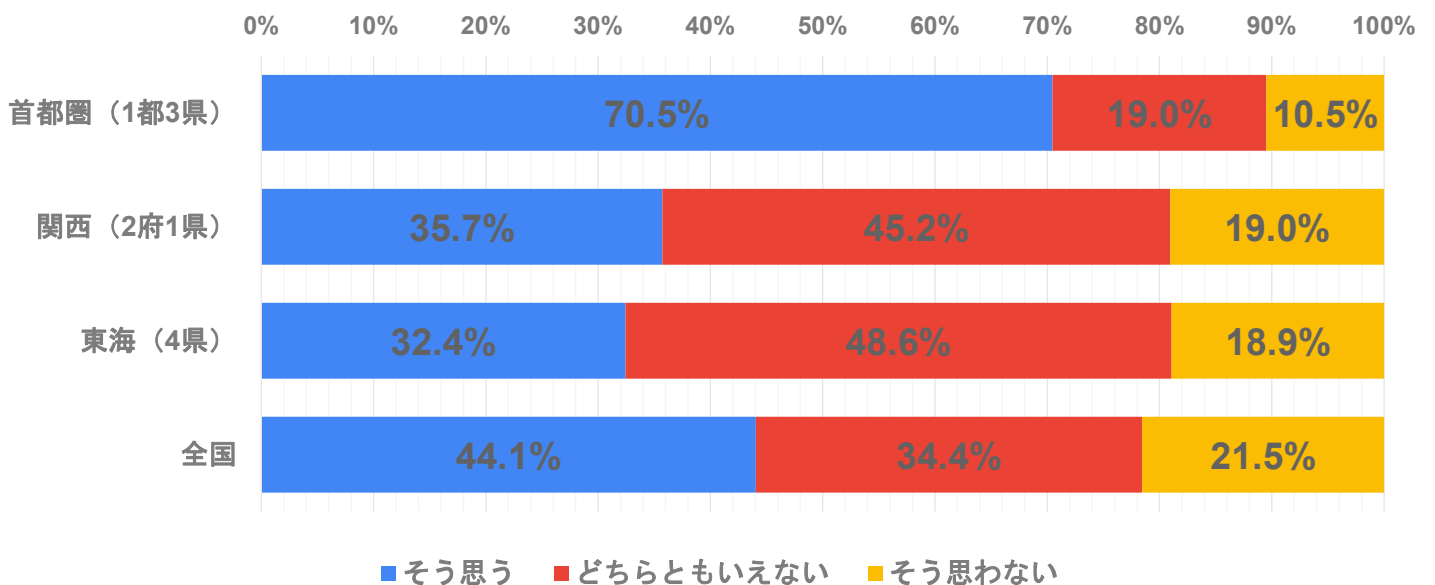
「家族葬がより一般的になる」



15

今後の見通し（一日葬）

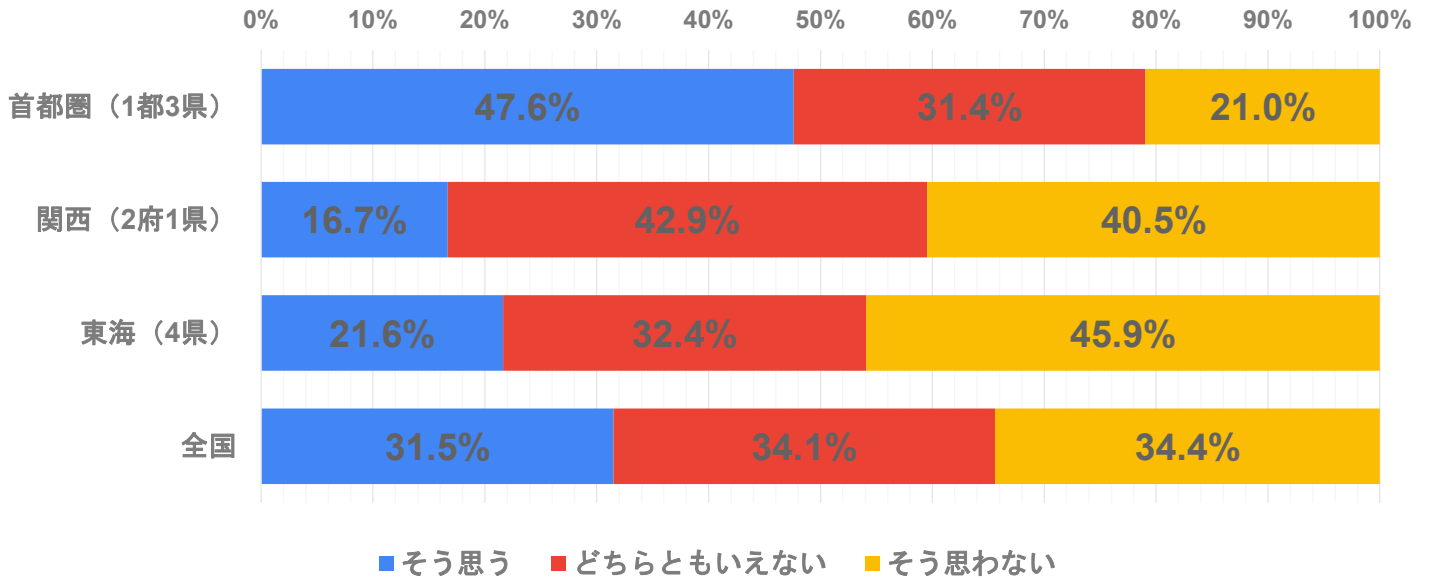
「一日葬がより一般的になる」



16

今後の見通し（直葬）

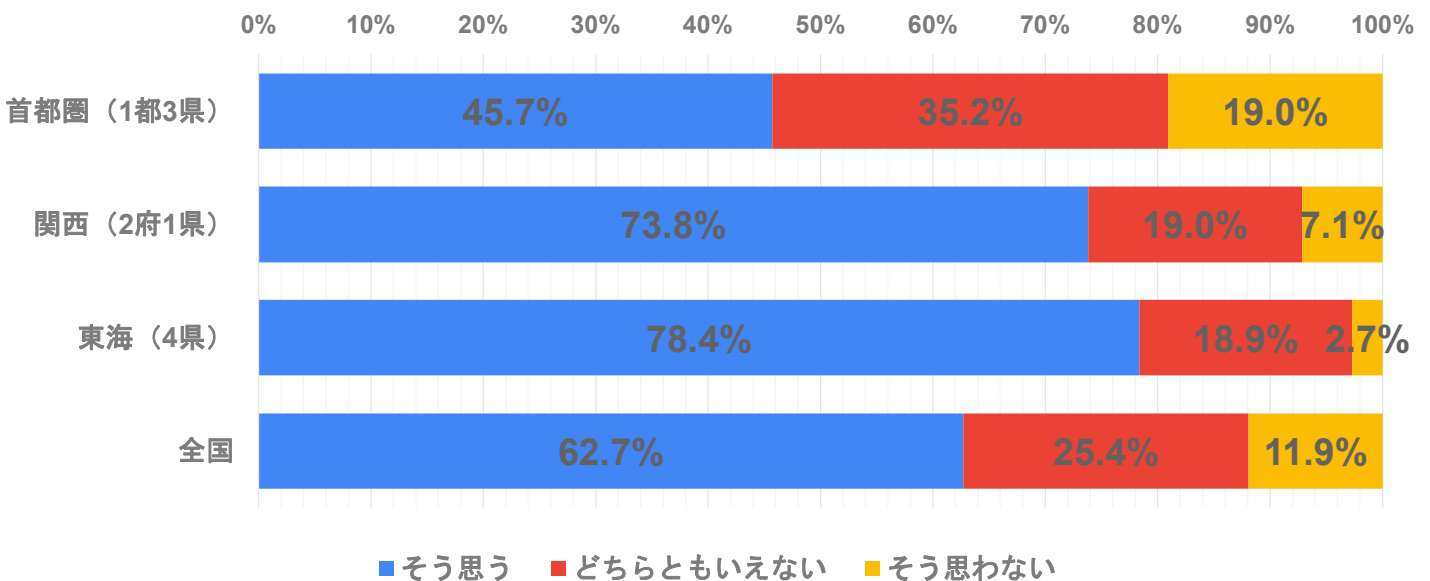
「直葬が増える」



17

今後の見通し（出仕僧侶）

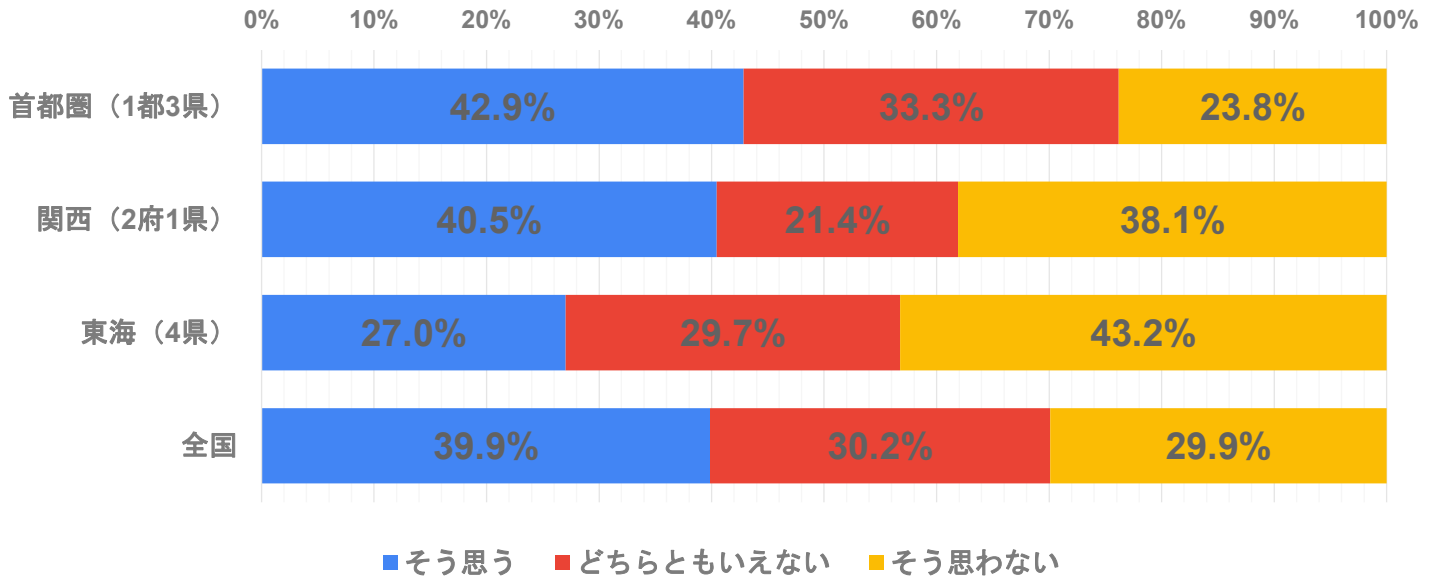
「葬儀の出仕僧侶の数が減る」



18

今後の見通し（年回法要）

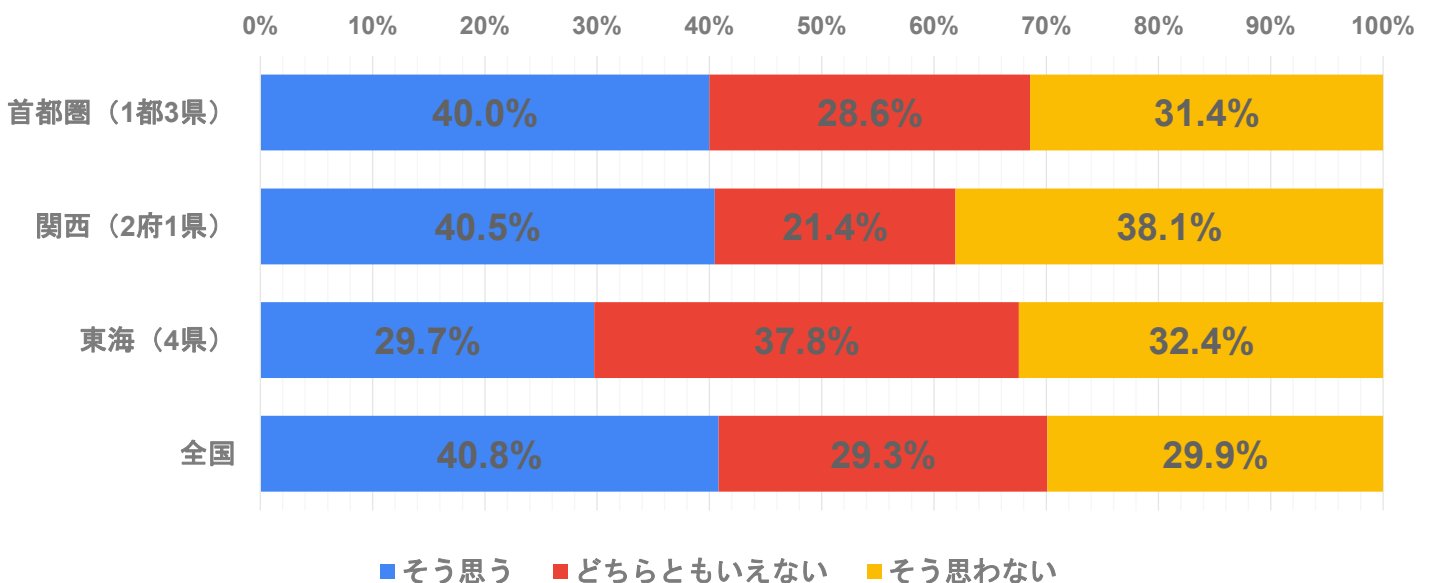
「年回法要が減少する」



19

今後の見通し（檀信徒との関わり）

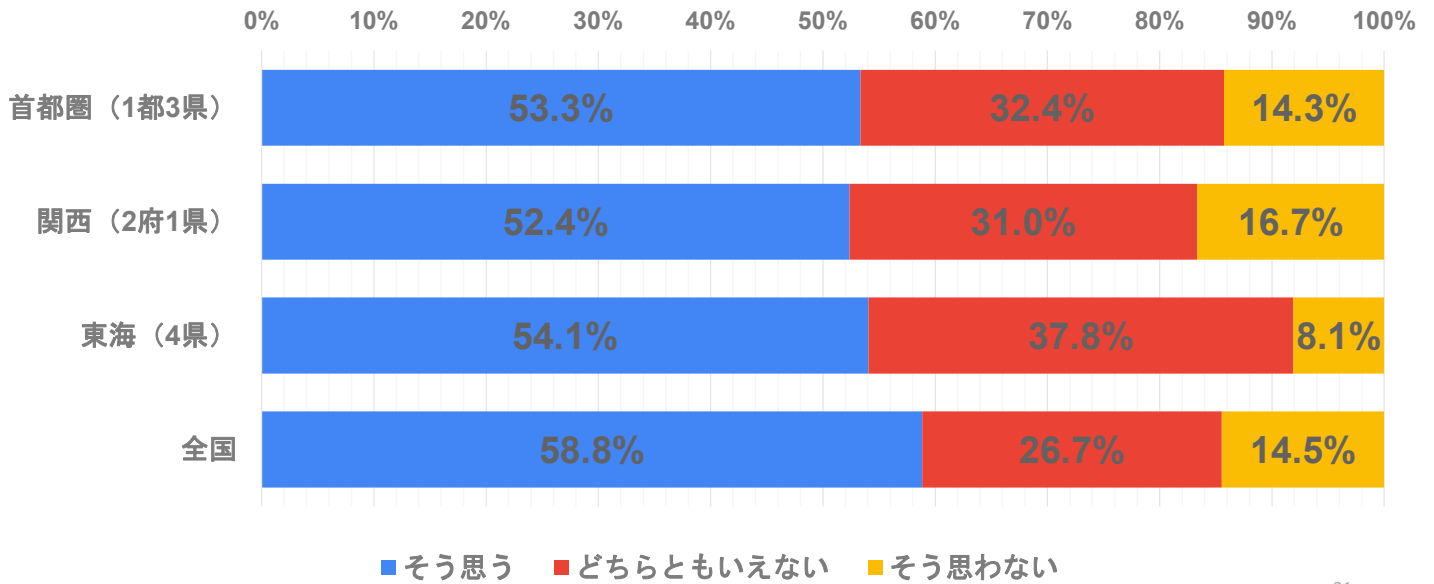
「檀信徒との関わりが減少する」



20

今後の見通し（世代間継承）

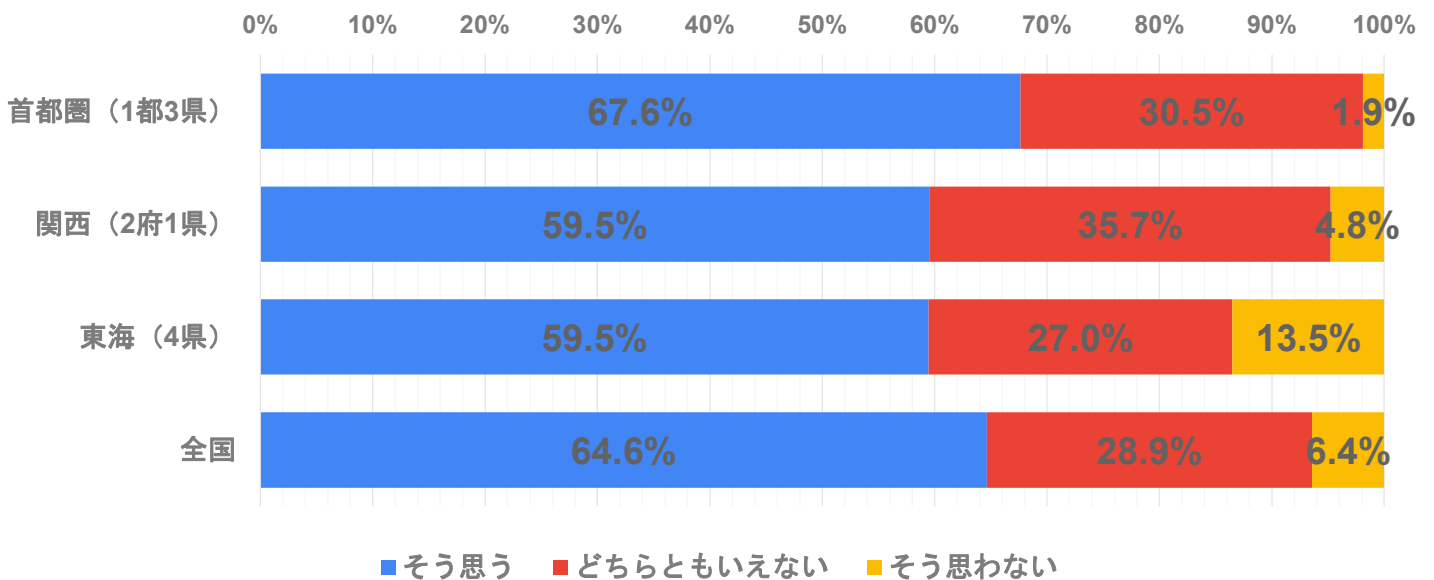
「檀信徒の世代間で信仰が継承されない」



21

今後の見通し（寺院収入）

「寺院収入が減少する」



22

簡単なまとめ

- 葬儀・法事の規模縮小（参列者の減少）が定着している。地域差は見られず、全国的な状況といえる。今後、家族葬が一般的になっていくと予想する声も地域差は見られない。
- 一日葬などの簡素化は、1年ごとに10%の上昇がみられる。
- 簡素化は首都圏が当初より高い割合で、他の地域は低かったものの、年々、他地域にも広がりを見せている。出仕僧侶の減少の予測からも、今後の小規模化が不可避との見方を多くの僧侶がしているのでは。
- 簡素化（一日葬・直葬）が一般的になるという予測は、首都圏と他地域では差が見られる。コロナ以前の一日葬の普及度合いの差か？
- 世代間不継承、寺院収入減少を予測する声が全国的に過半数。

23

少し、脱線します

24

全日本仏教会・全日本葬祭業協同組合連合会 「葬儀に関わる僧侶の実態調査」

- アンケートの目的: 今後の寺院、葬儀、僧侶の在り方の考察にあたり、葬儀に関わる僧侶と葬儀社との関わりについて、実態を把握することを目的とした。
- アンケート集計期間: 令和3年9月20日(火)～10月20日(木)
- アンケート対象: 全日本葬祭業協同組合連合会に加盟する葬儀事業者(1,269社)
- 回収率: 236件(回収率: 18.6%)

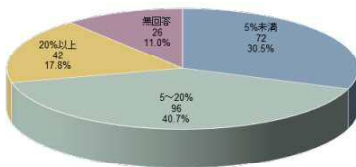
25

問2: 僧侶が携わらなかった葬儀の割合

直近1年間で僧侶が携わらなかった葬儀の割合

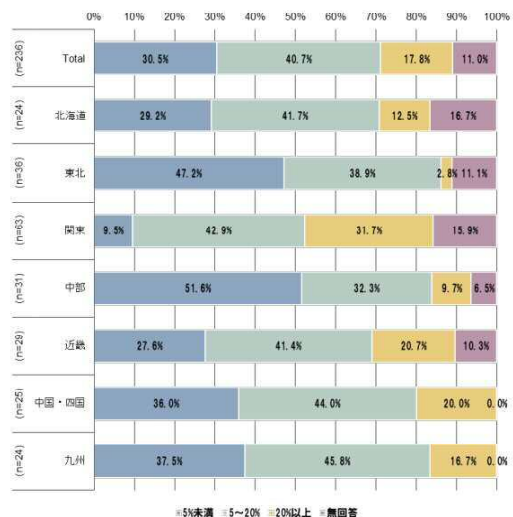
- 「5～20%」の割合が最も高く40.7%となっている。次いで、「5%未満(30.5%)」、「20%以上(17.8%)」となっている。

(n=236)



直近1年間で僧侶が携わらなかった葬儀の割合: 地域別

- 僧侶が携わらなかった葬儀の割合を地域別に見ると、関東地方では、「僧侶の携わらない葬儀の割合が20%以上」が31.7%と高くなっている。
- 一方、「僧侶の携わらない葬儀の割合が5%未満」は、中部(51.6%)、東北(47.2%)が高くなっている。

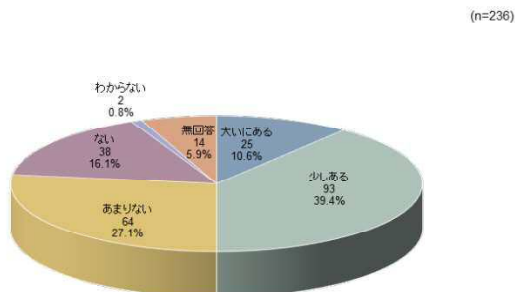


26

問3: 僧侶が失礼な態度である、遺族に寄り添いがないと感じた状況

僧侶が失礼な態度である、遺族に寄り添いがないと感じた状況

- 半数の50.0%が、僧侶が失礼な態度である、遺族に寄り添いがないと感じた経験がある、となっている。



失礼な態度だと感じた状況・具体的内容

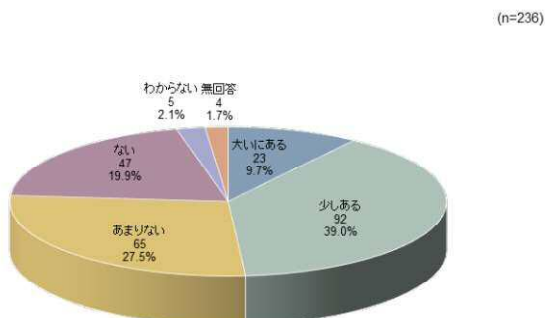
- 「遺族に対し横柄な態度、言葉遣いである」の割合が最も高く55.1%となっている。次いで、「お布施でもめる(42.4%)」、「日程を強引に決める(41.5%)」となっている。



問4: 僧侶から理不尽な要求をされた経験

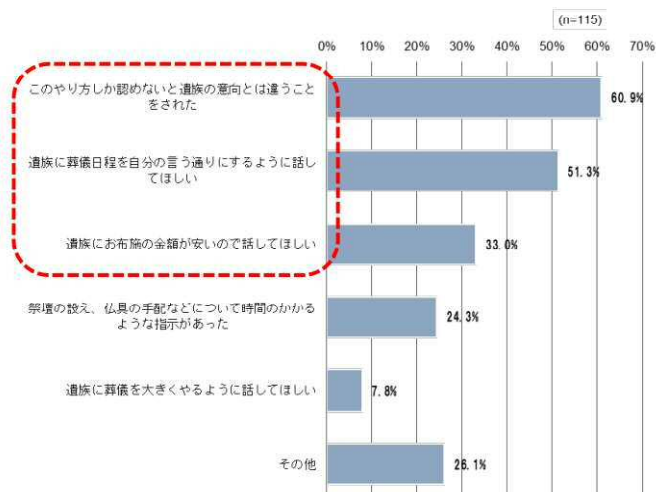
僧侶から理不尽な要求をされた経験

- 「少しある」の割合が最も高く39.0%となっている。「大いにある(9.7%)」と合わせると、半数近くの48.7%が僧侶から理不尽な要求をされた経験がある、となっている。



僧侶から理不尽な要求をされた経験・具体的内容

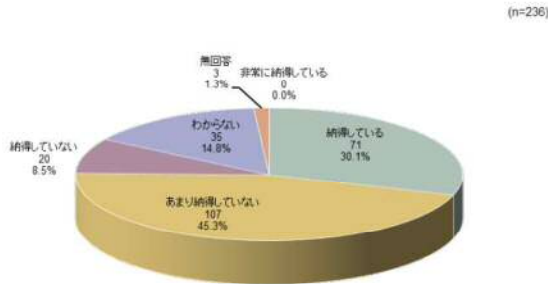
- 「このやり方しか認めないと遺族の意向とは違うことをされた」の割合が最も高く60.9%となっている。次いで、「遺族に葬儀日程を自分の言う通りにするように話してほしい(51.3%)」、「遺族にお布施の金額が安いので話してほしい(33.0%)」となっている。



問5: 遺族側のお布施の納得感

遺族側のお布施の納得感

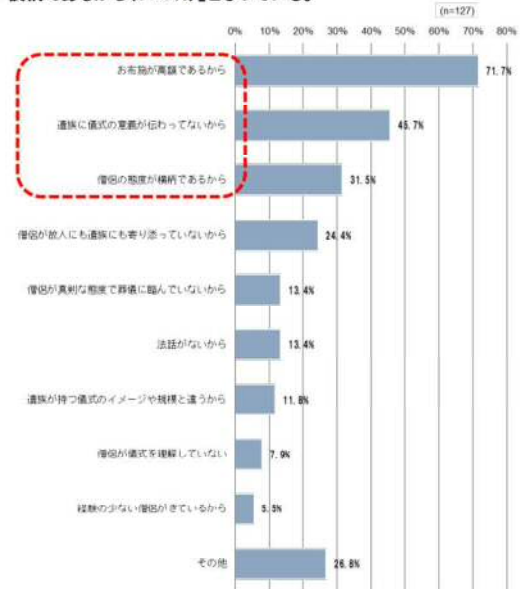
- 「あまり納得していない」の割合が最も高く45.3%となっている。「納得していない(8.5%)」と合わせると、半数以上の53.8%がお布施の金額に納得していないことが分かる。
- 「非常に納得している」との回答は、0.0%となっている。



9

遺族側のお布施の納得感・具体的内容

- 「お布施が高額であるから」の割合が最も高く71.7%となっている。次いで、「遺族に儀式の意義が伝わっていないから(45.7%)」、「僧侶の態度が横柄であるから(31.5%)」となっている。

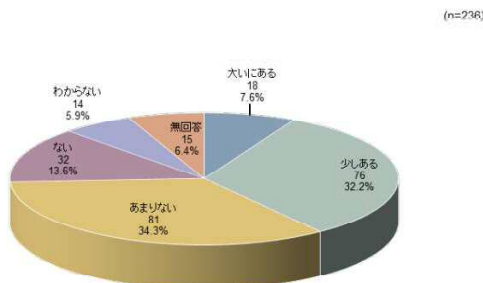


29

問6: 僧侶として相応しくない、社会的常識がないと思われる行動や態度をみた経験

僧侶として相応しくない行動や態度をみた経験

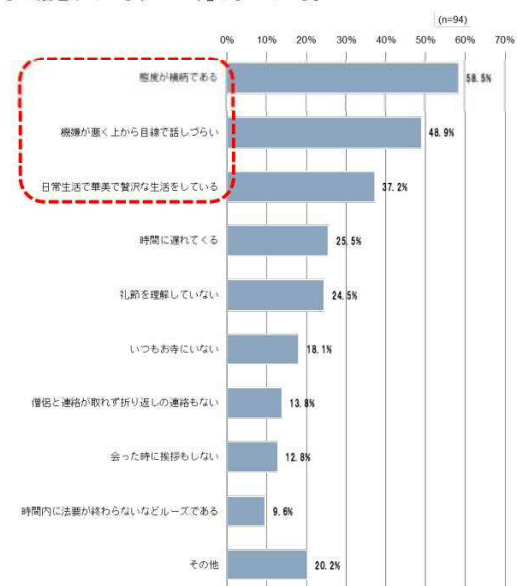
- 「あまりない」の割合が最も高く34.3%となっている。次いで、「少しある(32.2%)」、「ない(13.6%)」となっている。



11

僧侶として相応しくないと感じた行動や態度の具体的な内容

- 「態度が横柄である」の割合が最も高く58.5%となっている。次いで、「機嫌が悪く上から目線で話づらい(48.9%)」、「日常生活で華美で贅沢な生活をしている(37.2%)」となっている。

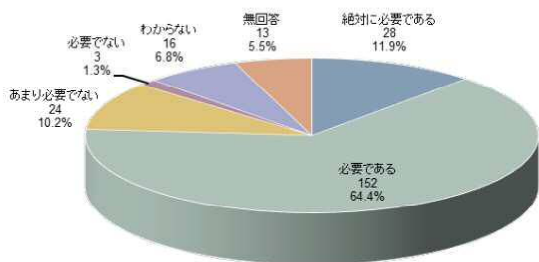


30

問8: 今後の葬儀に際しての僧侶の必要性

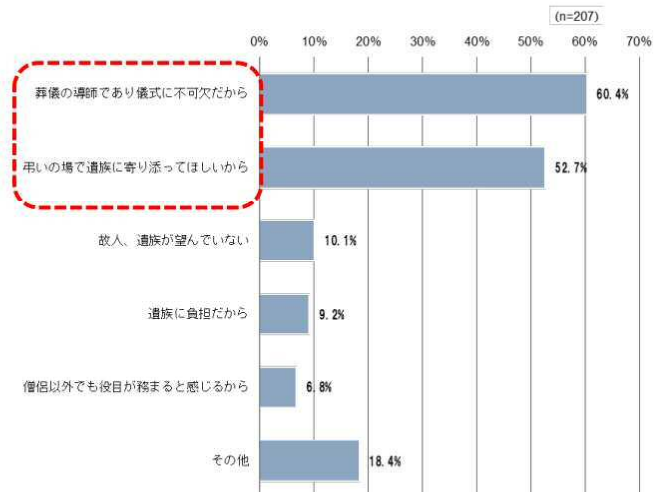
今後の葬儀に際しての僧侶の必要性

- 「必要である」の割合が最も高く64.4%となっている。次いで、「絶対に必要である(11.9%)」、「あまり必要でない(10.2%)」となっている。



今後の葬儀に際して僧侶が必要な理由

- 「葬儀の導師であり儀式に不可欠だから」の割合が最も高く60.4%となっている。次いで、「弔いの場で遺族に寄り添ってほしいから(52.7%)」となっている。



一方でこんな調査も.....

株式会社寺院デザイン 寺院総合研究部門 全国生活者意識調査「コロナ禍と仏事」

- 調査目的: コロナ禍、およびアフターコロナにおいて、生活者が仏事(葬儀、法事など)についてどう考えているかを調査し、日本人の死生観を考える資料とする。
- 集計期間: 令和3年8月9～15日
- 調査対象: 40歳以上の男女
- 調査方法: インターネットによるアンケート調査

33

調査サマリーより

- ① 供養を大切に思う気持ち、供養に関わる行動は、軒並み高ポイント。コロナ禍を経て、さらにポイントが高まる。

前年との比較では、軒並み、供養に対して積極的な人が増えている。法事や葬儀など、供養に関わる活動も自粛の傾向がある中で、むしろ供養の大切さを再確認した人が多いということがうかがわれる。

34

調査サマリーより

- ② 儀式の簡素化を望む方向に。
家族だけの儀式を望むパーソナル化の傾向も。

供養を望む人が多いという結果と矛盾するように思われるが、背景には供養のパーソナル化がある。本調査の回答でも、「家族だけで」という言葉の入るものは、すべて高いポイントを占めている。

パーソナルなものを望むのは、人々の暮らしのコミュニティが縮小していることが前提にある。つまり簡素化は、供養の気持ちの衰えではなく、現実社会のコミュニティ縮小が招いた結果ということだ。

35

調査サマリーより

- ③ オンラインの儀式に反発を感じる人は3割(36.0%)を超える。前年の21.0%に比べても、大幅アップ。コロナ禍でオンラインに慣れた人が、むしろ儀式のオンラインに反発。

調査の結果、オンラインの儀式をこころよく思わない反対派が多く、2020年に比べても大幅に反対派が増えている。

オンラインでの会議や会話を体験している人が増えている中、その体験が、オンラインの物足りなさを自覚させ、それが反対派の増加につながっていることが考えられる

36

- 葬儀の現場では横柄な態度、遺族に寄り添っているとは思えない態度、一方的・強圧的な態度をとる僧侶がかなり多いことが判明。布施に関する不満、儀礼の意義が伝わっていないなど、僧侶と檀信徒・遺族とのコミュニケーション不足、僧侶からの説明不足が大きな要因と思われる。
- 先祖や亡き人への供養は大切だという意識は薄らいでおらず、対面での儀礼を大事に思う人も少なくない。
- コロナの影響もあり、「家族だけで」供養したいという人が増えている。家族葬(葬儀の小規模化)は、ネガティブな傾向なのか、一般人目線で考えることも必要だろう。

37

戻ります

38

考察

- 葬送儀礼は時代とともに変化してきた。自宅で近隣住民の協力のもとつとめた時代→高度経済成長期に葬祭ホールなどで大規模化→小規模・簡素化→コロナが後押し。
- 小規模化（家族葬）の流れは止めるのは困難と思われる。
- しかし、それは良くない傾向なのだろうか？葬儀社への調査からは、僧侶と檀信徒・喪家とのコミュニケーション不足（態度、儀礼の意義不明等）が、不信・不満の要因として見えてくる。大勢が参列する葬儀よりも、家族葬の方が、僧侶が喪家とゆっくり話す機会、儀礼の意味を丁寧に説明する機会はとりやすく、消費者の「供養したい心」に応えられる好機と考えられるのではないか。

39

考察

- 一日葬や直葬に関しては、葬儀社主導を指摘する声もある。「寺院－葬儀社－檀信徒」という図式になっている現状を考えると、平時から檀信徒と葬儀についての話をしておくことが必要。
- 葬儀や法要での丁寧な説明、コミュニケーションも、積もり積もれば、次の葬儀時に「しっかりお葬儀を出そう」という意識につながっていくと期待。
- そして、寺院・檀信徒が安心して託せる葬儀社を見つけるおくことも重要だろう。寺院－業者という上下意識ではなく、協働して良い葬儀をつとめるという仲間意識をもって、信頼できる他職種と日頃から連携を築くこともおすすめしたい。

40


ご清聴ありがとうございました

令和 5年 2月 13日



第45回 浄土宗総合研究所
公開シンポジウム

岐路に立つ、
これからの
「お葬式」
～本質から葬送を考える～

 クローバーグループ
小金井祭典株式会社
代表 是枝 つぐと



本日お話すること

- 本質から葬送を考える
葬とは
- アウトソーシングから
インハウスへの岐路
- 負荷をかける
グリーンワークとして

是枝 嗣人 1979年 3月 6日 生 43歳



- 東京都小金井市生まれ
- 立正大学佛教学部佛教学科佛教学コース卒
- 2000年 大学3回生時に葬儀業界へ
- 2007年 小金井祭典株式会社を設立 28歳時
- 2009年～ グリーフサポートの専門家を目指す
- 2011-2012 東京大学市民後見人講座修了
介護者支援のNPO法人 理事を受任 (2017)
- 2013年 弔い百年塾 高野登氏 (元リッツカールトン日本総支配人) と講演
(築地本願寺)
- 2019年～ ラジオパーソナリティー 是枝つぐとのおみおくり
百科 栃木放送・山梨放送にて放送中
- 2021年 日本一笑顔になれるお葬式 扶桑社より 刊行



岐路に立つ、

これからの

お葬式



①なぜ岐路に

立ったのか

その先は



②どんな岐路に

立っているのか



③この岐路に

我々に

何ができるのか



皆さんと共に

考えていきたいと思えます



考えてみましょう

葬儀って何？



葬

儀式

ほうむる

艸

草

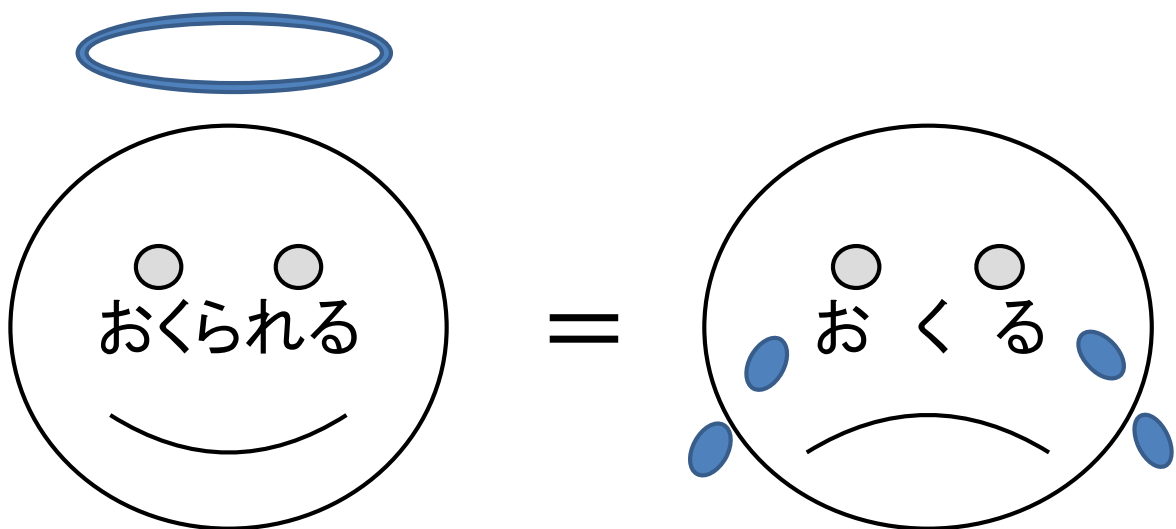


葬

艸
死
艸

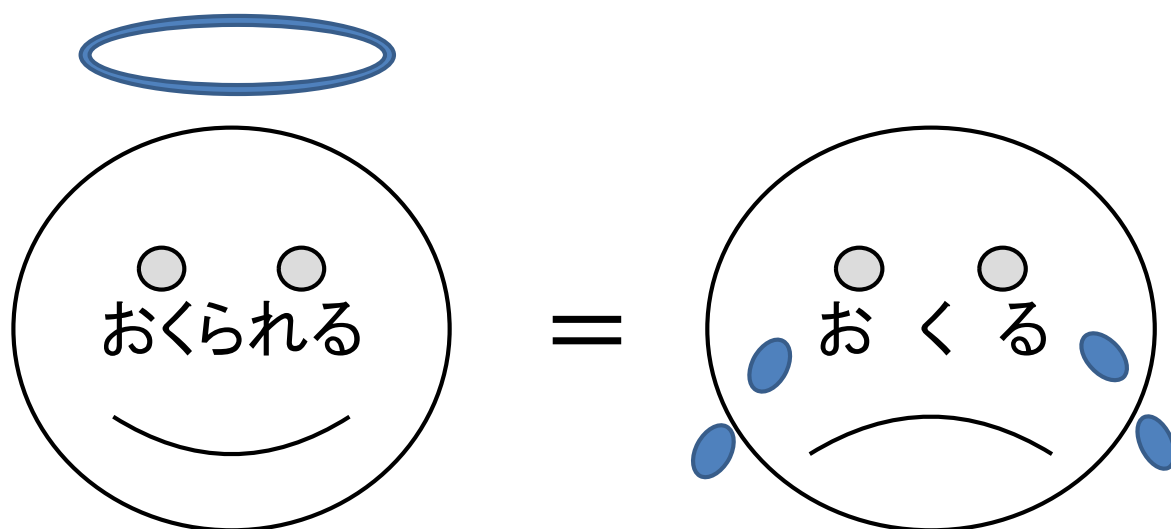


つ ま り





死者と葬る人がいれば葬は成り立つ



死者と葬る人がいればあとはオプション





ただ、このオプション

歴史は古い

ネアンデルタール人の

花 (12,000年前)



人の営みのなかで

葬送は

本質をつかみながら様々なカタチ

で死者と人と共にありました

※問芝先生ありがとうございました



しかし、
高度経済成長期からバブルを経て
2000年くらいまでのおみおくりは

様々な **ハード**ウェア(商材・建物)
や
ソフトウェア(サービス)
が
付加されていった



その反動で
今世紀以降

①岐路にいつ立ったか
現在のおみおくり



付加されていったハードやソフトに
価値を見いだせない
デコレーションされた価値の排除



①岐路にいつ立ったか
結 果



元来持ち合わせていた
葬送の本質を踏まえた儀礼までも

剥ぎ取られてしまっている

枕経・香典・通夜・葬儀・野辺のおくり
初七日・忌明け返し・埋葬・墓など



忘れてはならない

人は一人では生まれ育たないように
現代社会の中で大勢の人の支えの中
シニアライフから供養までを執り行う

介護士・看護師・医師・公務員・葬儀社
宗教者・霊柩車・火葬場・石材店・霊園など



その様な中

コロナ患者とその家族は
全てを委ねる事しか
許されなかった

(すべてを強制的に剥ぎ取られた)

葬送を考え直す機会



②どのような岐路

に立っているのか

二極化



アウトソーシング

(他人にお任せをする)

と

インハウス

(自分でやれることをする)



従来の葬送は

僧侶・大家族や
地域コミュニティーに
支えられていた

看取り・葬送



アウトソーシング

家での看取りから
病院での看取りへ

自宅でのお葬式から
葬儀会館でのお別れへ



高額な価格に見合った
至れり尽くせりのサービスが
シニアライフ・看取りから葬送
までをパッケージ化した



高額への反動で
葬祭サービスのシンプル化
低価格や一日葬などの
味気のないアウトソーシングな
お葬式が増える一方



価格の高低に関わらず

全てを他人に委ねて葬送を行うのは

日本の古来のお弔いのカタチ

喪や忌の間はアウトソーシング
悪いことではない



しかし、葬送儀礼に

本来含まれている大切なモノを

剥ぎ取ってからのアウトソーシングは

インハウスに比べると弱い

在宅医療でのお看取りの増加や
インターネットの普及による
情報公開や、核家族化による
人並みでなくてよいといった
選択肢の増加が



丁寧に看取り、おくりたいという
インハウスなお葬式への
ニーズへの二極化へと繋がった

葬送のホスピタリティ
費用をかけずとも
丁寧なおくりはできる



インハウス(参加型)

葬儀という1点にその先の種を蒔く

庭の花 霊柩車の位置 会葬礼状
看取り 葬儀 供養の中で



葬送の本質

時代は変われどカタは変わらず

しかし

時代と共にカタチは変化し続けていく

白装束と靴下



③この岐路に我々ができること

インハウスにあたり

遺族に負担ではなく

ちょっとだけ負荷をかける



してはいけないこと
しなければならないこと

したくないこと
してあげたいこと

しっかり理解して**偏らない**
適切なアドバイス大切



ちょっとだけかかる**負荷**は

何に対して効果を

発揮するのでしょうか



グリーフ(悲嘆)って知ってますか？



グリーフって何？

喪失による悲嘆

です。



死別を代表する

喪失体験で

人のココロはどうなるか...



是枝 嗣人
日本一笑顔になれるお葬式 大切な人が亡くなる前に知っておきたい葬儀の本当のハナシ

★★★★★ (2)



Kindle版 (電子書籍)
¥1,540 (15pt)

単行本 (ソフトカバー)
¥1,540 (15pt)



日本一笑顔になれるお葬式

大切な人がなくなる前に
知っておきたい本当のハナシ

第3章 悲しみを正しく癒す

この後 パネルデスカッションで

全国の大型書店やアマゾン等で
好評発売中

扶桑社より



自分らしさは
周囲との関係で作られる。



死別により大切な人と
一緒に多くの物が失われる



13

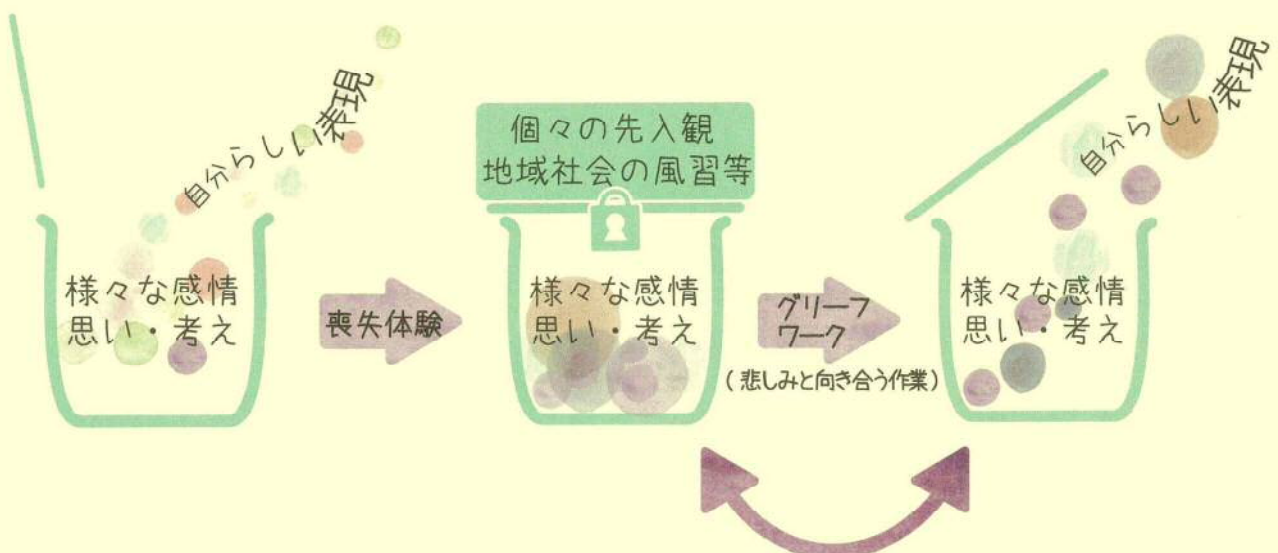
※冊子「大切な人を亡くしたとき」より

グリーフの状態から
感情を表に出せるようになるまでのプロセス



今までの状態

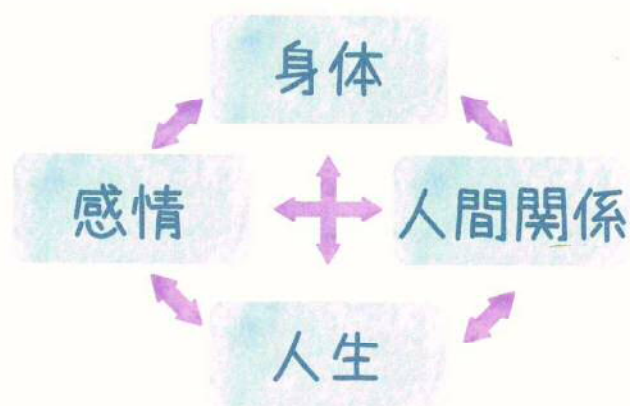
感情を表に出せた状態



※冊子「大切な人を亡くしたとき」より 行ったり来たりを繰り返す。



グリーフによって影響を受ける
「4つのエリア」



※冊子「大切な人を亡くしたとき」より



グリーフサポート～心のサポート

- **グリーフ(悲嘆)**と向き合うために
何もできなくてもいい時間を認める
感情を表に出していいと認め合う
- **オリジナルであること**の大切さ
襲い来る悲嘆と向き合うために
アレをしてあげられなかった より
これもしてあげられた をたくさん創る



良いグリーフワークとは (悲嘆との向き合い方)

葬送の段階で
少しでも**負荷**をかけること
終わった後必ず襲ってくる
グリーフと
向き合うためのトレーニング



最大の**グリーフワーク**
(悲嘆との向き合い方)は

しっかりと看取ること
しっかりお別れすること
しっかり供養すること



③この岐路に我々ができること

各々の立場の中で

グリーンフワークのために
理解を持ち 支える

その一步を今踏み出しましょう



まとめ

これからのお葬式
アフターコロナでの岐路

こころと身体の余裕があるときは全てを
アウトソーシングしてしまわないで

コロナ患者は全てを
委ねる事しか許されなかった

まとめ



これからのお葬式 アフターコロナでの岐路

死者の尊厳と
遺族のこころのサポート
を守ることが当たり前の
インハウス(参加型)な
お葬式を創り出していきませんか



ご清聴ありがとうございました

【コロナ禍における婚礼の現状と「お葬式」との共通点】

目白大学短期大学部
専任講師
杉浦 康広

○自己紹介

杉浦 康広(目白大学短期大学部ビジネス社会学科講師)

- ・東洋大学大学院国際観光学研究科修士課程修了(修士)
- ・専門分野・・・ホテル、ブライダル、ホスピタリティ
- ・職歴・・・(株)京王プラザホテルに勤務。

京王プラザホテル(新宿)、
京王プラザホテル八王子、
京王プラザホテル多摩
2019年より現職

- ・職種・・・宴会担当、ウエディングプランナー
担当した婚礼は800組以上。



【コロナ禍における婚礼の現状と「お葬式」との共通点】

1. 婚礼の現状と特性

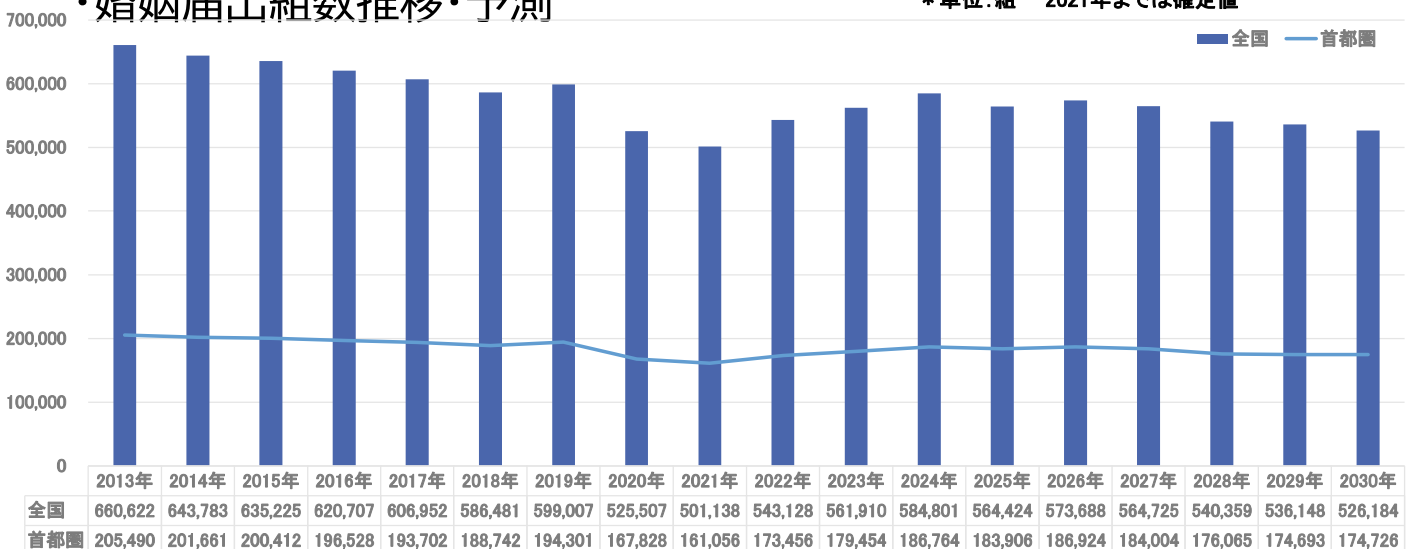
2. 結婚式と「お葬式」の共通点

3. まとめ

1. 婚礼の現状と特性

・婚姻届出組数推移・予測

* 単位: 組 2021年までは確定値



出典：リクルートブライダル総研HPより

1. 婚礼の現状と特性

・婚姻届出組数の減少

1. 少子化

2. 非婚の広がり

3. 結婚意識の変化

1. 少子化

新成人年齢推移				
1988年	1998年	2008年	2018年	2023年
194万人	174万人	135万人	123万人	117万人

2. 生涯未婚率の上昇 ⇒ 男性25.7%、女性16.4%(2022)

3. 事実婚の増加 など

⇒ 夫婦別姓などが影響

1. 婚礼の現状と特性

・結婚に関するイベントの実施数も低下

1. ナシ婚

2. ジミ婚

3. スマ婚

1. ナシ婚・・・婚姻届けは提出したもののイベントは何も行わない

2. ジミ婚・・・華美にしない結婚式(小規模など)

3. スマ婚・・・お金を掛けずに安く婚礼をすること

1. 婚礼の現状と特性

・婚礼イベント減少の主な理由

1. 晩婚化

2. 再婚層の増加

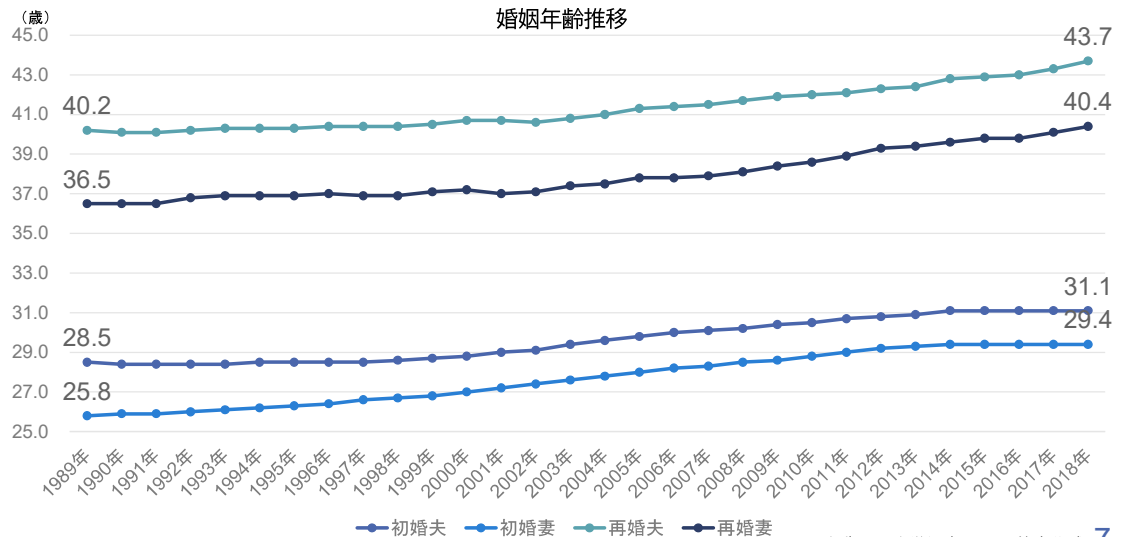
3. 結婚式に関する意識の変化



1. 婚礼の現状と特性

・婚礼イベント減少の主な理由

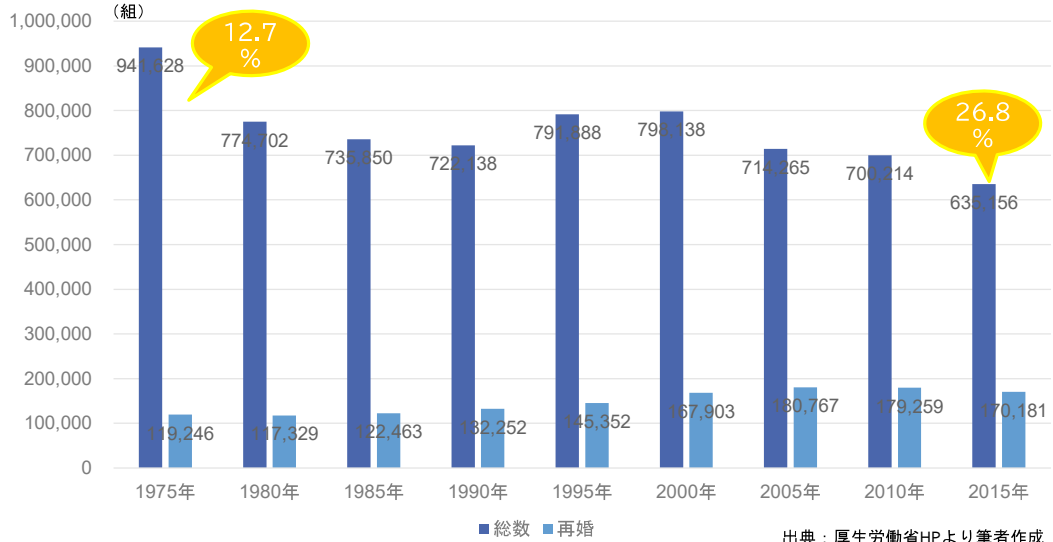
1. 晩婚化



1. 婚礼の現状と特性

・婚礼イベント減少の主な理由

2. 再婚層の増加

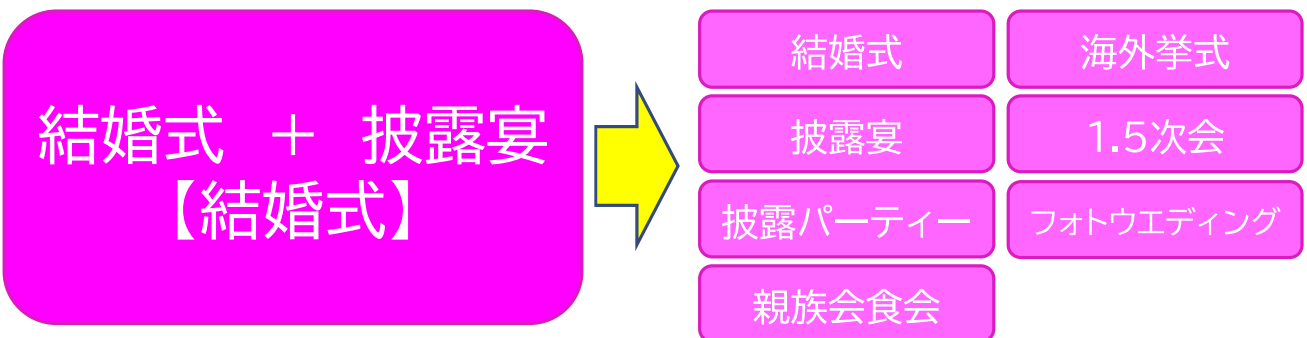


1. 婚礼の現状と特性

・婚礼イベント減少の主な理由

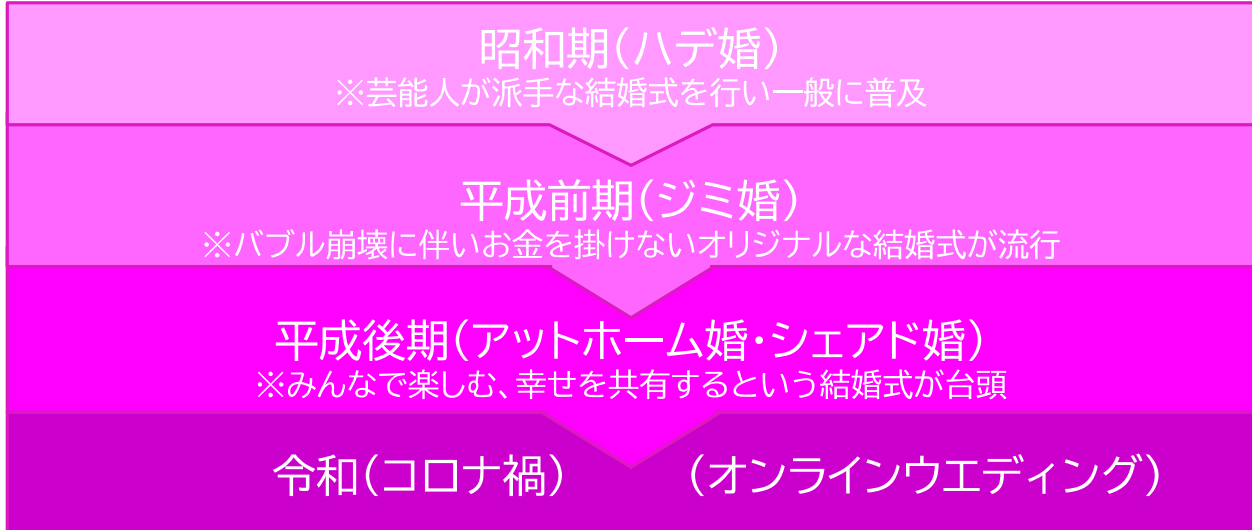
3. 結婚式に対する意識の変化

・結婚に関するイベントの多様化



1. 婚礼の現状と特性

・婚礼の歴史



10

1. 婚礼の現状と特性

・コロナ禍の婚礼

* 婚礼規模の縮小 ⇒ 婚礼の少人数化

* 結婚式・披露宴のスタイルの変化

⇒ 挙式での生演奏減少、スピーチなどの余興減少など

* オンライン・ウエディングの普及

⇒ オンライン環境が発達し、オンラインウエディングが普及

11

1. 婚礼の現状と特性

・披露宴を行った理由(上位)

理由	割合
親・親族に感謝の気持ちを伝えるため	79.9%
親・親族に喜んでもらうため	65.7%
友人など親・親族以外の方に感謝の気持ちを伝えるため	55.2%
以前からあこがれていたため	50.0%
友人など親・親族以外の方に喜んでもらうため	42.1%
自分たちが楽しむため	39.1%

出所：ゼクシィ結婚トレンド調査2022より筆者作成

1. 婚礼の現状と特性

・コロナ禍の婚礼

* オンラインウェディング

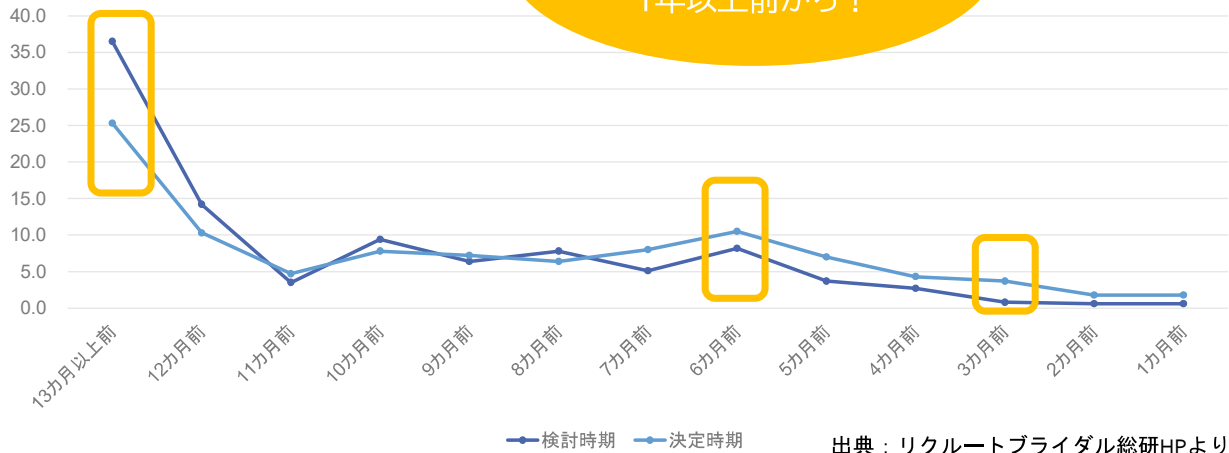
⇒ 列席者と直接会いたかった、新郎新婦以外の披露宴の雰囲気を感じられなかったなど好評とはいえない



一方でオンライン環境が整ったことによって、DX化が進み
打合せ環境が変化した

1. 婚礼の現状と特性

・婚礼商品の特性 【申し込み時期】



1. 婚礼の現状と特性

※商品特性

1. 高額商品 * 料金がかかる

2. 未体験商品 * 当日にならないとわからない

3. 消滅商品・一回商品 * 一度しかない

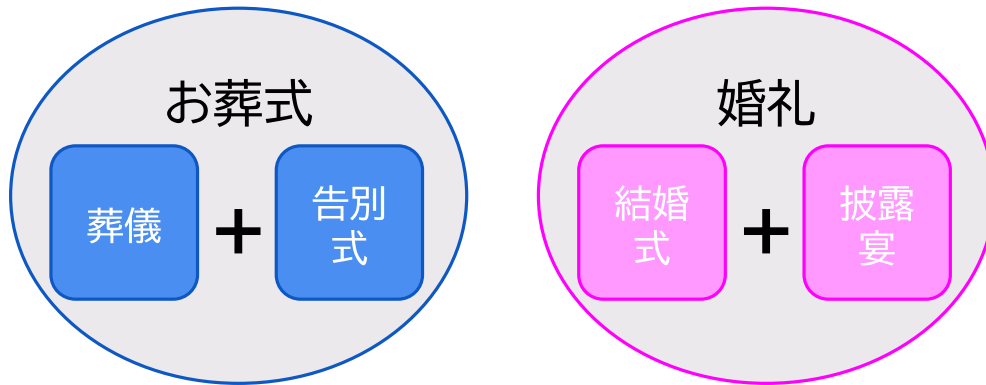
4. 皆異(かわいい)商品 * 同じものがない

お葬式との
【共通点】とも
考えられる

2. 婚礼とお葬式の共通点

※非日常の特別な【時間】の創出

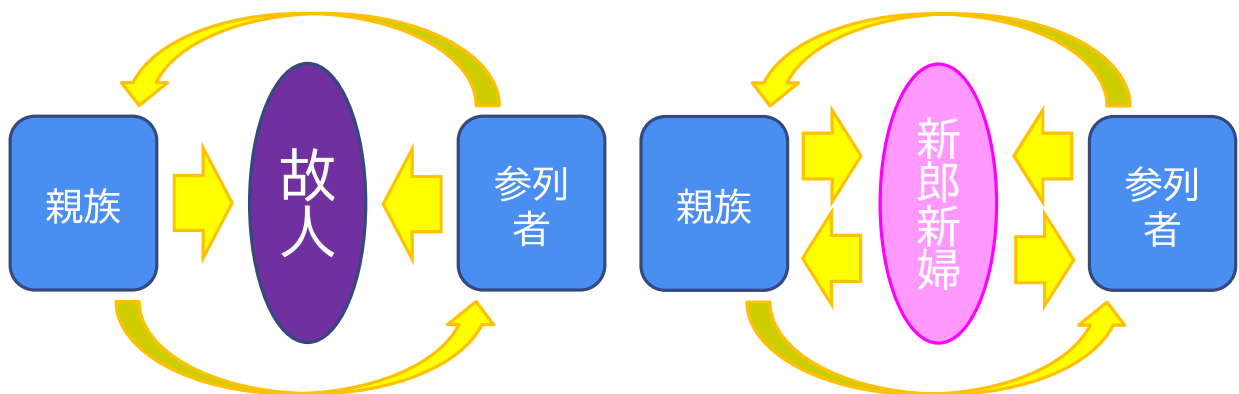
※儀礼・儀式と式典(共に過ごす時間)から成り立つ



2. 婚礼式とお葬式の共通点

※時間・空間としての共通特性

・故人、新郎新婦を中心とした時間と意識の共有



2. 婚礼とお葬式の共通点

※婚礼とお葬式に対する意識の変化

⇒必ず行わなければならないという意識の変化

※婚礼とお葬式のスタイルの多様化

⇒様々なスタイルがあり選択の幅が広がっている

※時代の変化とスタイルの変化

⇒時代の流れ(トレンド)とともにスタイルが変化している

3. まとめ

※新郎新婦や故人を中心とした【時間の共有】という点では結婚式とお葬式は大きな共通点があるといえる。この【時間の共有】という観点は今後も変わらずに重要であると考えられる。

※結婚式もお葬式も【感謝】を伝える場であるということは共通している。【感謝】はキーワードであるといえる。

葬儀の読経と意味

浄土宗総合研究所研究員/浄土宗久保山光明寺住職

石田一裕

仏の本願の称名なるが故に声を本体とは思召すべきにてそうろう

1. 発表の狙い

「葬儀における読経の意味」を葬儀の導師の経験を通して考えてみる

浄土宗の葬儀（『新纂浄土宗大辞典』「葬儀式」より）

死者を弔うための一連の儀式。遺体の処理、死の社会的確認、伝統的地域共同体の地縁血縁者による喪家はじめ地域社会全体の精神的物質的な危機の克服、先祖への仲間入り、家業繁栄・子孫安寧などの守護祈願、遺族・親族の悲嘆の軽減、関係者の仏道への導入、などの意味・目的もある。浄土宗において葬儀式は、阿弥陀仏の来迎引摺を仰ぎ、故人に剃度・引導作法を行って仏弟子とし、念仏を称えて極楽往生を念じすすめる儀式である。よって、故人の極楽往生を遂げせしめることが第一義であり、娑婆での生との別離と極楽への再生を果たすものである。

宗教や宗派ごとに「葬儀」の意味があるはずだが、この発表ではそれを踏まえつつ、自分自身とその場をメタな視点から観察し、記述する。

2. 読経とは：お経は誰の言葉か？

経とはブツダや祖師の言葉＝私の言葉ではなく、他者の言葉

⇒読経は「読む私」と「書かれた経」の出会い

下田正弘「仏とは何か？」

経典は「如是我聞、一時仏在……」から始まります。経典の冒頭において、伝承の中でまず確認されねばならないのは、「自己の存在」と「ブツダの存在」であります。この二つは同時に存在が確認される事柄となっています。（中略）この経典で語られるブツダは、かつて歴史上の特定の時期に存在した歴史的ブツダですが、それが自分を通して現在に呼び戻されているのです。¹

⇒声に出して経文を読むとき、遙か昔に滅したブツダが、そこにあらわれている。

¹ 下田正弘 1999 「仏とは何か？」、『駒沢短期大学仏教論集』5、1-17

3. 葬儀について

仏式葬儀の要素

- ①遺体あるいは遺骨や遺影
- ②参列者（遺族親族・弔問者）
- ③導師（僧侶）

①遺体あるいは遺骨や遺影

死そのもの、あるいはそれを象徴するもの。失われたもの。

それは「生」とは反対にあるものであり、非日常、あるいはあの世に属している。

②参列者（遺族親族・弔問者）

生そのもの、残されたもの。「死」とは反対にあるものであり、日常、あるいはこの世に属している。

③導師（僧侶）

生と死を結びつける担い手、その意味で生と死の場の Conductor（導師＝指揮者）。日常と非日常のはざまにあるもの。

葬儀はあの世とこの世を結びつける

高橋原は「儀礼の力」で例にまつわる宗教者の対応について以下のように指摘する(p. 58)。

相談相手として宗教者がすぐれている点があるとすれば、そのひとつが、彼らが何らかの御利益が期待される儀礼の執行者として社会に存在しているということである。

また同書は被災地の宗教者が心霊相談に対して辛抱強く話を聴き、僧侶であれば経文を唱えること、神職であれば祝詞を奏上すること、牧師であれば聖書の一節を読むこと、などの儀礼的な対応がありうることを指摘している (p. 34)²。

声はいろいろな宗教の儀礼において役目を果たしている。

宗教的な祈りの声には「生と死」「この世とあの世」「私と仏」などを結びつける機能があるのでは。

葬儀の導師の声は死者や仏の呼びかけであり、かつその声は参列者にも届くものである。

² 高橋原・堀江宗正『死者の力』岩波書店、2021

供養の場における読経の意義

- 導師は生と死の両方に属する存在
- 読経の声は導師を音源として同心円状に広がることで、その場を結び付ける
- それゆえ読経の声は、生きている人々の思いを故人へ届けながら、故人の思いを生きている人々に届けている

拙著『お坊さんはなぜお経を読む』より

お坊さんは、お経を読みます。仏さまからの教えを語り継ぎ、その中で自分自身が仏さまを近くに感じるために。

お坊さんは、お経を読みます。その声の中で、死別に苦しむ人々の想いと亡くなった方との想いが結び付くようにと祈りを込めて。

お坊さんは、お経を読みます。時を超えて、仏さまの前でさまざまなつながりが生まれることを願って。

これからの「お葬式」のために

声の力を確認する

よい声とは何かを追求し続ける

聞きやすい音程、木魚や鐘のリズムなど音楽的な要素の追求

死・仏・あの世と向き合う

導師の声はまずあの世へと向かっていくので、その実在を信じることが重要。

死はすべての終わりではなく、新たな生のスタート。

声と体を用いた儀礼を通じて、あの世にリアリティを付す。

この世の声を拾うこと、そしてそれによって伝えること

導師の声には参列者の思いが込められている。

参列者の声を聞き、思いを理解して、儀礼に臨む。自分の背中で思いを受けて、それをあの世へと届けていく。

意味が分からない読経（この世とあの世をつなぐ声）の後には、日常のことば（この世の声）で、その儀礼の意味を伝えること。非日常と日常の組み合わせによってこの世とあの世の結びつきが深くなる。